一般国道 23 号　中勢道路

埋蔵文化財発掘調査概報 20

2008.7

三重県埋蔵文化財センター

木造赤坂遺跡第８次調査②･③地区全景（南上空から）

向山遺跡全景（南上空から）

例　　言

1　本書は、三重県が国土交通省中部地方整備局から委託を受けた一般国道23号中勢道路建設予定地にかかる平成19年度の埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。

2　調査にかかる費用は、国土交通省中部地方整備局の負担による。

3　調査の体制は下記のとおりである。

・調査主体　三重県教育委員会

・調査担当　三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ⅱ課

課　長	田村陽一				
主　幹	上村安生				
主　査	薗部英幸				
主　事	淺尾　太	石井康晴			
技　師	原田恵理子	水谷　豊	角正芳浩	野嶌美沙子	
臨時技術補助員	才木　薫	小林俊之			
室内整理員	黒川敬子	太田浩子	森川絹代	山口香代	北岡佳代子
	西山実公子	中西千鶴	浜崎佳代	中村敬子	小倉靖子

・土工作業受託機関　東海アナース株式会社

有限会社中浦土木

・空中写真測量受託機関　株式会社かんこう

4　調査期間中には、下記の方に専門的なご指導とご助言を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

定森秀夫（徳島大学）

5　本書作成にかかる整理及び報文執筆は、主として各遺跡の現場担当者による。

6　本書に用いた地図及び遺構実測図は、世界測地系による国土調査法の第Ⅵ座標系を基準とし、方位の表示は座標北を示す。

7　本書では、土層の色調については小山・竹山編『新版標準土色帖』（22版1999年）を使用した。

8　本書に用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。

ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝・自然流路　ＳＥ：井戸　ＳＲ：道路状遺構　ＳＨ：竪穴住居

ＳＫ：土坑　ＳＸ：方形周溝墓・中世墓　ＳＺ：池状遺構　Ｐｉｔ：柱穴・小穴

目　　次

Ⅰ 前　　言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（淺尾　太）・・1

1 中勢道路と埋蔵文化財保護・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
2 平成19年度の現地調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
3 平成19年度の整理作業と報告書作成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
4 公開普及・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ 木造赤坂遺跡（第８次調査）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

1 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（野嶌美沙子）・・7
2 第８次調査①地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（淺尾　太）・・7
3 第８次調査②・③地区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（野嶌美沙子）・・9
4 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（淺尾　太・野嶌美沙子）・・14

Ⅲ 池新田遺跡（第２次調査）・・・・・・・・・・・・（水谷　豊）・・18

1 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
2 遺　構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
3 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
4 まとめと今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

Ⅳ 向山遺跡（第４次調査）・・・・・・・・・・・・・（石井康晴）・・26

1 はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26
2 遺　構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
3 出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
4 まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・31

挿 図 目 次

Ⅰ　前　　言

第１図　　中勢道路路線内遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第２図　　中勢道路（13・14 工区）遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

Ⅱ　木造赤坂遺跡（第８次調査）

第３図　　木造赤坂遺跡調査区位置図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
第４図　　第８次調査①地区遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8
第５図　　第８次調査①地区出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第６図　　第８次調査②③地区遺構平面図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
第７図　　第８次調査②③地区出土遺物実測図①・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
第８図　　第８次調査②③地区出土遺物実測図②・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

Ⅲ　池新田遺跡

第９図　　池新田遺跡調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
第１０図　池新田遺跡遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
第１１図　池新田遺跡調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
第１２図　池新田遺跡遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
第１３図　池新田遺跡出土遺物実測図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

Ⅳ　向山遺跡（第４次）

第１４図　向山遺跡調査区位置図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
第１５図　向山遺跡遺構平面図 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
第１６図　向山遺跡出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30

表　目　次

第１表　　中勢道路発掘調査成果 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３～５
第２表　　平成 19 年度中勢道路調査遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

Ⅰ　前　　言

1　中勢道路と埋蔵文化財保護

中勢道路は、三重県中勢地域の道路網を充実させるとともに、交通緩和とバイパス周辺の適切な土地利用を図り、地域の経済発展に寄与するために、一般国道23号のバイパスとして計画された鈴鹿市北玉垣町から松阪市小津町までの延長33.8㎞の道路である。当事業地内における埋蔵文化財の保護取り扱いについての協議は昭和58年から行われているが、その詳細については既刊の各概報に記載されているので参照されたい。

2　平成19年度の現地調査

本年度、中勢道路埋蔵文化財発掘調査は20年目を迎えることになった。

平成19年度の埋蔵文化財発掘調査委託契約は、国土交通省中部地方整備局長と三重県知事との間で４月２日に締結した。契約期間は平成19年４月１日から平成20年３月31日である。

本年度の調査工程や具体的方法については，４月16日に国土交通省三重河川国道事務所と三重県埋蔵文化財センターで協議を行った。その後も同様の協議を７月、12月にも行い、発掘調査業務の円滑な推進を図った。

木造赤坂遺跡については、昨年度の第７－１次調査①地区の南側を第８次調査①地区、第７－２次調査②地区の北側部分を第８次調査②③地区として実施した。調査区の隣接地で水田が営まれていること等を考慮し、５月より②地区から現地調査に着手し、その後①・③地区の調査に着手した。特に②地区では鎌倉時代から室町時代の溝や土坑・井戸等をはじめとして、古墳時代から近世にかけての多くの遺構が確認された。

池新田遺跡については、平成16年度の第１次調査の結果を受け調査を実施した。木造赤坂遺跡第８次調査①地区と同様の条件と水はけの悪さや湧水等を考慮し、９月上旬から現地調査に着手した。古墳時代から鎌倉時代にわたる溝や中世墓・道路状遺構等を確認した。

向山遺跡については、平成17・18年度の調査結果を受け調査を実施し、方形周溝墓９基を確認した。

これら３遺跡の埋め戻しまでのすべての調査が終了したのは20年１月であった。これにより13工区における現地調査は完了した。

3　平成19年度の整理作業と報告書作成

整理作業については、過年度に現地調査を実施した中林・中道遺跡、里前遺跡等の資料整理を鋭意行った。また、替田遺跡（第１・２次調査）、蔵田遺跡（第４次調査）の報告書を作成・刊行した。

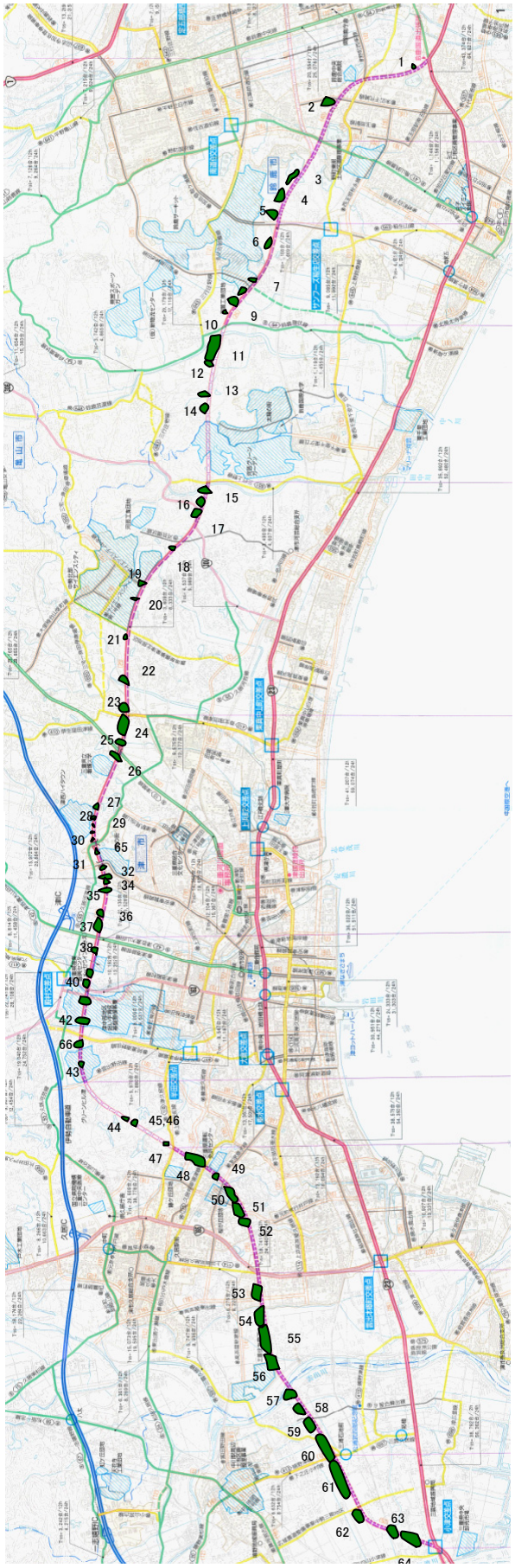
4　公開普及

発掘調査に伴う公開普及活動としては、高校生を対象とした現地学習、現地説明会、調査ニュースの発行等を行った。

現地説明会は、木造赤坂遺跡・池新田遺跡と向山遺跡で11月17日に午前と午後に分けて実施した。今年も天候に恵まれ、のべ人数で約130名の参加者があり、出土した遺物を間近で見ていただくことができた。

『中勢道路調査ニュース』は19年11月に木造赤坂遺跡第８次調査②地区と向山遺跡の調査成果を中心に№48を発行し、20年２月に木造赤坂遺跡第８次調査①地区と池新田遺跡の調査成果を中心に№49を発行した。

写真１　現地説明会の様子



4 工区				
	1	小塚遺跡	2	石垣遺跡
5 工区				
	3	池ノ下Ⅱ遺跡	5	甲懸Ⅱ遺跡
	4	野田遺跡	―	浄土池遺跡
6 工区				
	6	稲生遺跡	9	拝原遺跡
	7	南谷遺跡	10	高井Ａ遺跡
	8	間瀬口遺跡		
7 工区				
	11	森ヶ坪遺跡	13	船ヶ谷遺跡
	12	東谷遺跡	14	大野南遺跡
8 工区				
	15	成瀬Ａ遺跡	20	内垣内遺跡
	16	成瀬Ｂ遺跡	21	天堤古墳
	17	稲降遺跡	22	河崎遺跡
	18	丸市遺跡	23	六大Ａ遺跡
	19	山王遺跡		
9 工区				
	24	六大Ｂ遺跡	32	門脇北古墳
	25	橋垣内遺跡	33	コウゼンジ遺跡
	26	大古曽遺跡	34	宮ノ前遺跡
	27	新池２号墳	35	森山東遺跡
	28	新池１号墳	36	太田遺跡
	29	西岡１号墳	37	松ノ木遺跡
	30	西岡２号墳	65	長遺跡
	31	山籠遺跡		
10 工区				
	38	蔵田遺跡	42	里前遺跡
	39	位田遺跡	43	鎌切３号墳
	40	替田遺跡	66	梁瀬遺跡
	41	弐ノ坪遺跡		
11 工区				
	44	大釜南古墳	46	上はんの木古墳
	45	鳥羽見城跡	47	藤谷埴輪窯跡群
12 工区				
	48	相川西方遺跡	51	東山神遺跡
	49	丸地遺跡	52	本宮遺跡
	50	城ノ越遺跡		
13 工区				
	53	向山遺跡	57	舞出北遺跡
	54	池新田遺跡	58	舞出南遺跡
	55	木造赤坂遺跡	59	赤部遺跡
	56	井手ノ上遺跡	60	筋違遺跡
14 工区				
	60	筋違遺跡	63	中林・中道遺跡
	61	柏木遺跡	64	小津遺跡
	62	横堤遺跡		

第１図　中勢道路路線内遺跡位置図（縮尺は任意）

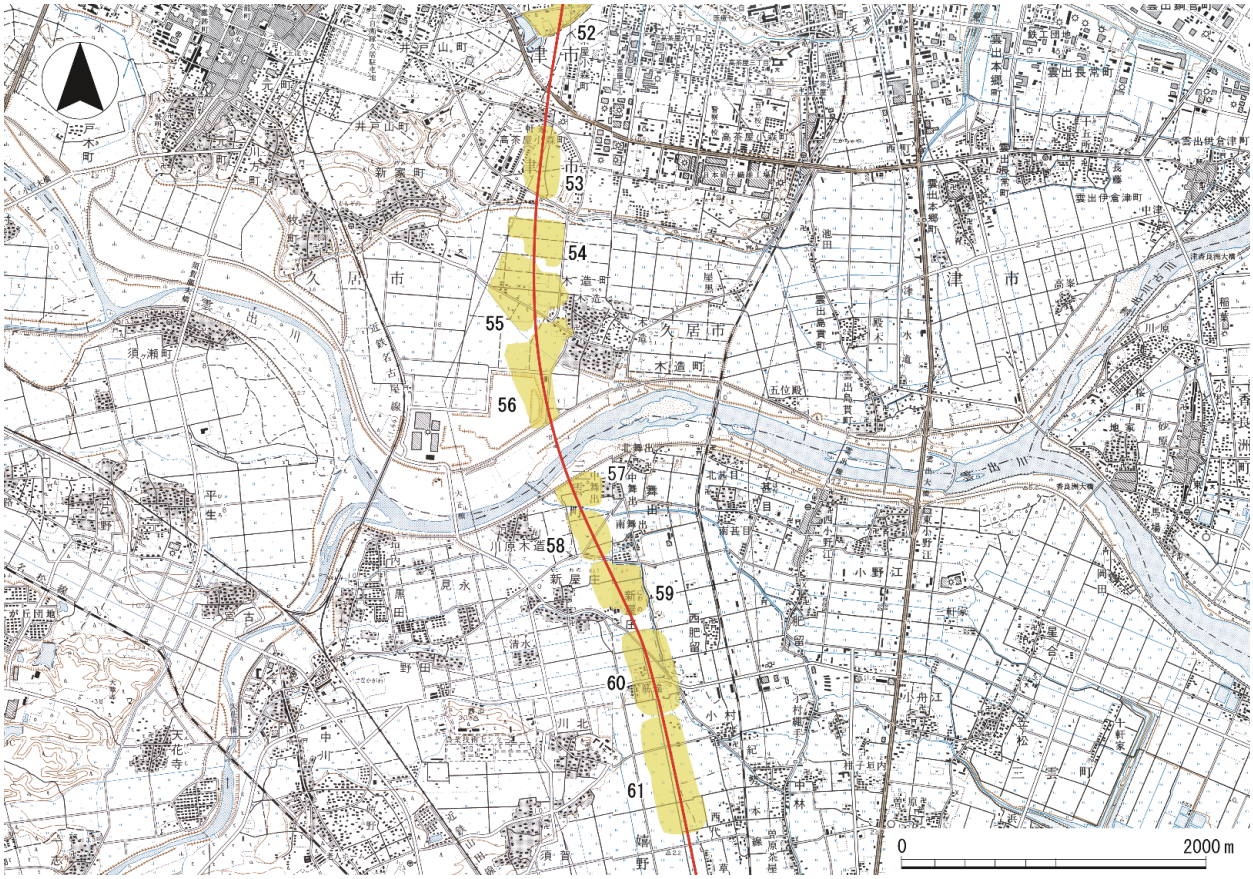
工区		遺　跡　名	所在地	対象面積(㎡)	調査面積(㎡)	S 63	H元	H 2	H 3	H 4	H 5	H 6	H 7	H 8	H 9	H 10	H 11	H 12	H 13	H 14	H 15	H 16	H 17	H 18	H 19	
5工区	3	池ノ下Ⅱ遺跡	鈴鹿市稲生町	17,000	1,300																1,300					※1
		旧：池ノ下遺跡			0																					
	4	野田遺跡	鈴鹿市稲生町	12,600	970																970					※1
					0																					
	5	甲懸Ⅱ遺跡	鈴鹿市稲生町	6,200	1,150																1,150					※1
		旧：甲懸遺跡			2,650																	2,650				※1
	—	浄土池遺跡	鈴鹿市稲生町	—	330																330					※1
					0																					
小　計				35,800	3,750	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3,750	0	0	0	0	
					2,650	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,650	0	0	0	
6工区	6	稲生遺跡	鈴鹿市稲生町	3,300	185				185																	
		旧：稲生 I-4 号窯			2,100					2,100																
	7	南谷遺跡	鈴鹿市稲生町	4,000	176				176																	
					1,300					1,300																
	8	間瀬口遺跡	鈴鹿市徳田町	7,000	96					96																
					0																					
	9	拝原遺跡	鈴鹿市御薗町	7,000	64					64																
					0																					
	10	高井Ａ遺跡	鈴鹿市徳田町	4,000	96					96																
					4,550								4,100	450												
小　計				25,300	617	0	0	0	361	256	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
					7,950	0	0	0	0	3,400	0	0	4,100	450	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
8－1工区	15	成瀬Ａ遺跡	津市河芸町三行	12,000	600																			600		
					0																					
	16	成瀬Ｂ遺跡	津市河芸町三行	8,700	140																			140		
					0																					
	17	稲降遺跡	津市河芸町北黒田	2,500	260																			260		
					0																					
小　計				23,200	1,000	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1,000	0	
					0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
8－2工区	18	丸市遺跡	津市河芸町南黒田	1,600	128						128															
					0																					
	19	山王遺跡	津市河芸町南黒田	3,700	128						128															
					0																					
	20	内垣内遺跡	津市河芸町南黒田	4,200	128						128															
					0																					
	21	天堤古墳	津市大里睦合町	900	55						55															
					0																					
	22	河崎遺跡	津市大里睦合町	10,600	256						256															
					0																					
	23	六大Ａ遺跡	津市大里窪田町	17,800	448						352	96														
					13,220							8,830	4,130	260												
小　計				38,800	1,143	0	0	0	0	0	1,047	96	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
					13,220	0	0	0	0	0	0	8,830	4,130	260	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

工区		遺　跡　名	所在地	対象面積（㎡）	調査面積（㎡）	S 63	H元	H 2	H 3	H 4	H 5	H 6	H 7	H 8	H 9	H 10	H 11	H 12	H 13	H 14	H 15	H 16	H 17	H 18	H 19
9工区	24	六大Ｂ遺跡	津市大里窪田町	24,600	444	416				28															
					26,235			17,525	3,420	3,350	1,270	670													
	25	橋垣内遺跡	津市大里窪田町	12,000	176	176																			
					12,000		7,000	4,925	75																
	26	大古曽遺跡	津市一身田	14,200	692	352		300		40															
					12,435				5,160	240	7,035														
	27	新池２号墳	津市一身田	1,000	198									198											
					0																				
	28	新池１号墳	津市河辺町	—	20	20																			
					0																				
9工区	29	西岡１号墳	津市河辺町	2,500	70				70																
					2,000					2,000															
	30	西岡２号墳	津市河辺町	1,000	30				30																
					0																				
	31	山籠遺跡	津市河辺町	1,100	208	208																			
					1,100		1,100																		
	32	門脇北古墳	津市河辺町	1,100	0																				
					1,100		1,100																		
	33	コウゼンジ遺跡	津市河辺町	—	80	80																			
					0																				
	34	宮ノ前遺跡	津市長岡町	2,800	144	144																			
					2,800		2,700				100														
	35	森山東遺跡	津市長岡町	5,230	240	240																			
					5,230	4,230	1,000																		
	36	太田遺跡	津市長岡町	3,320	469	469																			
					3,320	3,320																			
	37	松ノ木遺跡	津市安東町	7,800	144	144																			
					7,800		7,800																		
	65	長遺跡	津市河辺町	—	0																				
					3,700								3,700												
小　計				76,650	2,915	2,249	0	300	100	68	0	0	0	198	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
					77,720	7,550	20,700	22,450	8,655	5,590	8,405	670	3,700	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
10工区	38	蔵田遺跡	津市納所町	12,800	1,356		608						748												
					16,340							5,600	6,810	3,300			630								
	39	位田遺跡	津市北河路町	7,100	416		416																		
					5,260									4,600				660							※2
	40	替田遺跡	津市南河路	7,900	432		176							256											
					10,060									6,620	3,140										
	41	弐ノ坪遺跡	津市野田	5,700	320		320																		
					5,100										5,100										
	42	里前遺跡	津市野田	3,000	256		160							96											
					2,810											1,280						1,530			
	—	梁瀬遺跡	津市野田	—	1,152									474	678										
					3,620											3,620									
	43	鎌切３号墳	津市神戸	—	0	昭和 59 年津市教育委員会が発掘調査																			
					0																				
小　計				36,500	3,932	0	1,680	0	0	0	0	0	748	826	678	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
					43,190	0	0	0	0	0	0	5,600	6,810	14,520	8,240	4,900	630	660	0	0	0	1,530	0	0	0

工区		遺　跡　名	所在地	対象面積（㎡）	調査面積（㎡）	S 63	H元	H 2	H 3	H 4	H 5	H 6	H 7	H 8	H 9	H 10	H 11	H 12	H 13	H 14	H 15	H 16	H 17	H 18	H 19	
13工区	53	向山遺跡	津市	28,000	1,770																		1,370	400		
			高茶屋小森町		2,200																				2,393	
	54	池新田遺跡	津市木造町	16,300	554																	554				
					2,600																				1,961	
	55	木造赤坂遺跡	津市木造町	17,500	1,192																	1,192				
		旧：赤坂遺跡			28,850																		6,570	11,500	6,300	
	56	井手ノ上遺跡	津市木造町	12,500	800																	800				
					790																			370		
	57	舞出北遺跡	松阪市舞出町	9,600	960											810		150								
		旧：舞出遺跡			10,270												4,090	3,380				3,700				
	58	舞出南遺跡	松阪市舞出町	16,300	1,200											1,200										
		旧：松垣内遺跡			0																					
	59	赤部遺跡	松阪市	16,800	1,190													1,190								※3
		旧：新屋庄遺跡	嬉野新屋庄町		16,820																6,300	7,000	3,520			※3
	60	筋違遺跡	松阪市	37,000	3,680													1,640				2,040				
			嬉野新屋庄町		13,280														2,900				10,380			
小　計				154,000	11,346	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2,010	0	2,980	0	0	0	4,586	1,370	400	0	
					74,810	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4,090	3,380	2,900	0	6,300	10,700	20,470	11,870	10,654	
14工区	60	筋違遺跡	松阪市	—	770													770								
			嬉野新屋庄町		5,410														5,410							
	61	柏木遺跡	松阪市	31,000	1,470													1,470								
			嬉野川北町		2,990															540	2,450					※3
	62	横堤遺跡	松阪市	21,500	1,140													1,140								
			嬉野津屋城町		0																					
	63	中林・中道遺跡	松阪市中道町	18,600	1,010													1,010								
		旧：狭間遺跡			8,470														1,040	5,240	2,190					
	64	小津遺跡	松阪市小津町	23,000	1,424													1,190		84	150					
		旧：東浦遺跡			11,220														280	3,780	7,160					
小　計				94,100	5,814	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5,580	0	84	150	0	0	0	0	
					28,090	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6,730	9,560	11,800	0	0	0	0	
合　　計				484,350	30,517	2,249	1,680	300	461	324	1,047	96	748	1,024	678	2,010	0	8,560	0	84	3,900	4,586	1,370	1,400	0	
					247,630	7,550	20,700	22,450	8,655	8,990	8,405	15,100	18,740	15,230	8,240	4,900	4,720	4,040	9,630	9,560	18,100	14,880	20,470	11,870	10,654	

（アミカケについては、※１：鈴鹿市教育委員会実施　※２：津市教育委員会実施　※３：松阪市（嬉野町）教育委員会実施）

第１表　中勢道路発掘調査成果



第２図　中勢道路（13・14 工区）遺跡位置図（１：50,000）

工区	番号	遺　跡　名	所　在　地	調査面積	調査期間	担　当　者	備　　考
13工区	53	向山遺跡	津市 高茶屋小森町	2,393 ㎡	平成 19 年８月６日 ～平成 19 年 11 月 29 日	上村安生　石井康晴 角正芳浩	11 月 17 日現地説明会 参加者 130 名
	54	池新田遺跡	津市木造町	1,961 ㎡	平成 19 年９月７日 ～平成 19 年 12 月 26 日	原田恵理子　水谷 豊	
	55	木造赤坂遺跡	津市木造町	6,300 ㎡	平成 19 年５月 10 日 ～平成 20 年１月 28 日	薗部英幸　浅尾 太 原田恵理子　角正芳浩 野嶌美沙子　才木 薫 小林俊之	
合　　計				10,654 ㎡			

第２表　平成 19 年度中勢道路調査遺跡

Ⅱ　木造赤坂遺跡（第８次調査）

１　はじめに

木造赤坂遺跡は津市（旧久居市）木造町に所在し、雲出川下流左岸の低位段丘上から氾濫平野にかけて位置している。木造は、平安時代末から室町時代にかけて「木造荘」として史料に散見される。室町時代には北畠氏の流れをくむ木造氏が木造城に拠り独自の勢力を保っていた。

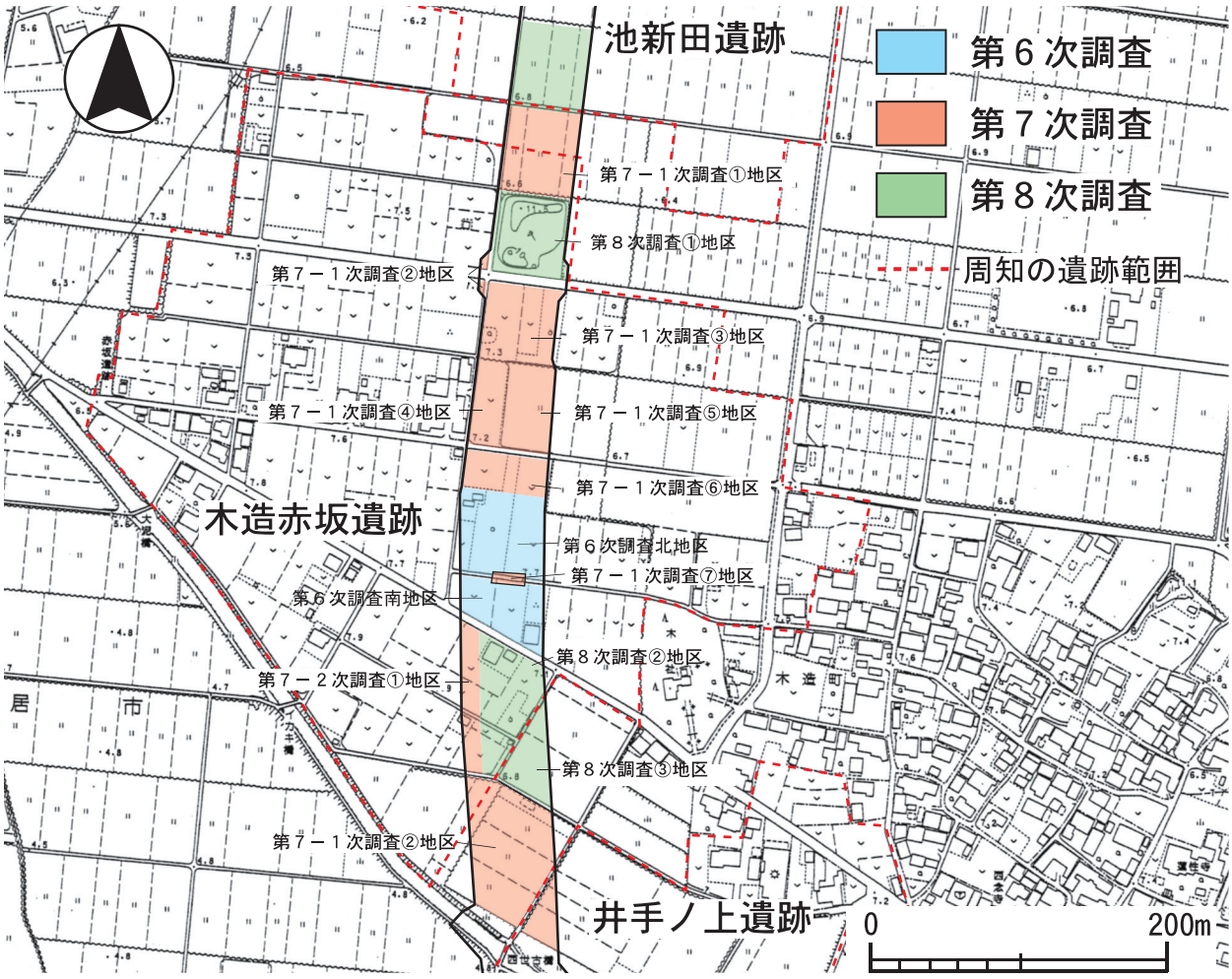
本年度は 6, 300 ㎡の調査を行った。調査区は第①～③地区の３箇所を設定した。①地区は遺跡の北端部にあたり、②・③地区は遺跡の南部にあたる。現況はいずれも畑地・水田である。遺跡の東には木造の集落の中心があり、西には田畑や宅地が点在する。南北は低地となっており水田が広がる。

以下、地区ごとに概観する。

２　第８次調査①地区

a　基本層序

基本層序は上層から建築廃材等を含む廃土、黒色土、黒褐色粘質土、褐灰色粘土、にぶい黄色粘性シルトである。黒褐色粘質土と褐灰色粘土層は調査区北西部の一部で削平されずに残っているのみで、その他の部分は、広く削平されている。このため大部分は、廃土直下に黒色土・黒褐色粘質土層が極薄く見られるか、廃土直下ににぶい黄色粘性シルト層が見られ、にぶい黄色粘性シルト層が深く削平を受けている部分もある。遺構検出は、にぶい黄色粘性シルト層上面で行った。



第３図　木造赤坂遺跡調査区位置図（１：5, 000）

b　調査の成果

（１）弥生時代後期から古墳時代前期

ＳＤ805　全体的な形は、現代の撹乱により不明だが、溝は方形に巡ると考えられる。弥生時代後期から古墳時代前期とみられる土師器壷（第５図７・８）が出土したことやその断面形状から、方形周溝墓の周溝の可能性がある。

（２）平安時代末期から鎌倉時代

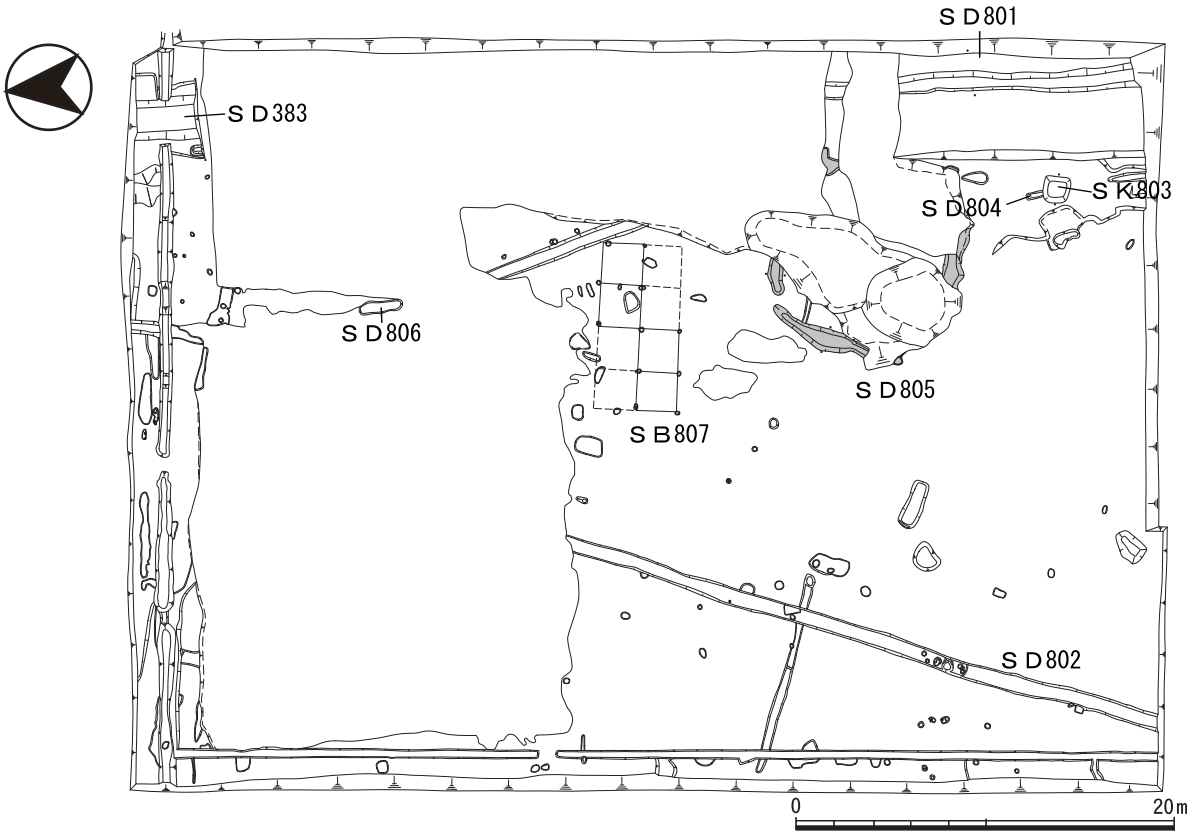
ＳＢ807　桁行４間×梁行２間の総柱建物を想定したが、柱穴が撹乱により削られている可能性がある。柱間隔は、2.0m～2.4m程である。柱穴が検出されていない等、南東部の状況については不明な点があり、削平を受けている北や東の部分にも本来は柱穴があり、廂や複数の建物が存在した可能性もある。遺物はわずかな土師器片が出土したのみで、時期を特定することは難しい。第６次調査で平安時代末から鎌倉時代の総柱掘立柱建物（ＳＢ173・174）が確認されており、柱間隔・棟方向がほぼ同じであることから、同時期のものと推察される。

ＳＫ803　一辺約1.3m、深さ約0.7m、平面方形である。いわゆる南伊勢系鍋の前段階[①]（12世紀前葉～中葉）に属すると見られる土師器甕（第５図６）が出土しており、平安時代末期の遺構と考えられる。

ＳＤ801　調査区の南東部で確認されたほぼ南北方

写真２　ＳＤ 801（北東から）

写真３　ＳＤ 802（北東から）



第４図　木造赤坂遺跡第８次調査①地区遺構平面図（１：400）

向の溝である。溝の東半分程が調査区外のため幅を特定することは難しい。第７－１次調査①地区で確認された溝ＳＤ383と埋土・規模・方向・時期等がよく似ていることから同一の遺構と考えられる。

出土遺物は、陶器椀・小椀・小皿、土師器皿・小皿・鍋がある。陶器椀は藤澤編年の第４型式新段階から第６型式[②]（12世紀後半～13世紀前半頃）のもので、輪花が施されるもの（第４図２）もある。陶器小皿には墨書がみられるもの（第４図１）もある。土師器皿（第４図３・４）は、雲出島貫遺跡の出土遺物と比較すると12世紀中葉から後葉のものと考えられる[③]。これらのことから、ＳＤ801は鎌倉時代に埋没したと考えられる。また、第６次・７次調査で、南北－東西方向に掘られた区画溝の可能性が指摘されている溝（ＳＤ241）があり、これと同時期であることから、区画溝である可能性がある。

ＳＤ802　調査区の南西部で確認された南西－北東方向の幅約0.9m、延長約33mの直線状の溝である。出土遺物は少なく、８世紀頃の土師器杯（第４図５）と土師器片が出土したのみである。第７－１次調査③地区で確認されたＳＤ303の延長上に位置し、埋土・断面形状がよく似ていることから、ＳＤ303と同一の遺構である可能性が考えられる。

ＳＤ804　前述のＳＫ803と重複する。藤澤編年の第６型式（13世紀前半頃）に比定される遺物が出土しており、鎌倉時代に埋没したものと考えられる。埋土が同じであることから、この溝の南で確認された溝状の遺構と一連のものとも考えられる。

（３）時期不明の遺構

ＳＤ806　土師器片が出土しているが、時期は不明である。

写真４　ＳＢ 807（東から）

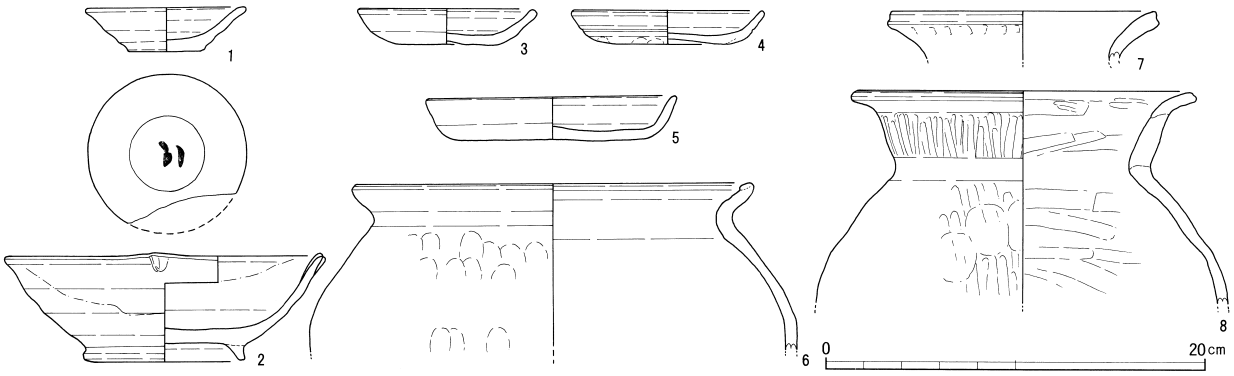
３　第８次調査②・③地区

ａ　基本層序

第８次調査②地区及び③地区（以下、②･③地区）は、木造赤坂遺跡の南部に位置する。昭和30年代に行われた土地改良事業によって②地区東側の南半部から③地区にかけて大きく削平され、②地区東側の南半部は盛土が行われている。この結果、③地区は②地区より一段低くなっている。

②地区の基本層序は上層から表土（耕作土）、にぶい黄褐色土層（包含層）、黒褐色粘質土層（いわゆる黒ボク）、黄褐色粘質土層（地山）である。このうち黒褐色粘質土層は調査区北半部にのみ確認できる。遺構は黒褐色粘質土層、もしくは黄褐色粘質土層上面から切り込んでいるが、今回の調査では黄褐色粘質土層上面で遺構検出を行った。

③地区の基本層序は表土（耕作土）、黄橙色粘質土層（地山）であり、黄橙色粘質土層上面で遺構検出を行った。



第５図　木造赤坂遺跡第８次調査①地区出土遺物実測図（１：４）

b　遺　構（第６図）

（１）古墳時代

竪穴住居１棟、土坑１基を検出した。いずれも出土遺物は少なく小片のため、詳細時期は不明である。

ＳＨ1000　南北約4.2m、東西約3.6mの平面長方形である。東側の隅は平安時代後期のＳＫ1028と重複する。残存する深さが６㎝と浅く、壁周溝や貼床、硬化面等は確認できなかった。床面から土師器甕の体部片が出土している。また、直上の包含層から台付甕の脚台部等が出土した。

（２）飛鳥・奈良時代

竪穴住居を少なくとも６棟検出した。多くは奈良時代のものである。いずれも非常に浅く、壁周溝や貼床等は確認できなかった。他に平面方形を呈しピットが非常に多く、底面の凹凸が多い２基を含む土坑を確認した。当該期の遺構は大半が調査区の北側に位置する。

ＳＨ902　西側は昨年度調査を行った第７－２次調査①地区に続いており、今年度の調査では東側を調査した。両調査区を合わせて南北約4.1m、東西約4.8m以上の平面長方形を呈する。今年度の調査では壁周溝は確認できていないが、第７－２次調査①地区では東西にのびる溝を２条確認しており、これが壁周溝であったと考えられる。出土遺物は土師器や須恵器の小片のみである。

ＳＨ917　南北約3.3m、東西約4.2mの平面長方形である。北東部に焼土を確認したが薄く、カマドは残っていなかった。土師器杯や宝珠つまみのついた須恵器杯蓋などが出土している。

ＳＨ921　東側が調査区外へのびるため全体は不明だが、南北約4.0m、東西約4.8m以上の平面長方形である。北部中央で焼土を検出したが、浅いものであった。須恵器の小片が出土しており、前述のＳＨ917によって切られている。また、埋土から混入と考えられる臼玉が２点出土している。

ＳＨ936　北側と南側が溝によって壊されており、全体は不明である。ピットが非常に多く、焼土は確認されていないものの埋土を洗浄した際に鉄くずが多数確認される等、他の竪穴住居とは性格の異なる遺構であったと考えられる。

写真５　ＳＨ 1000（南から）

（３）平安時代

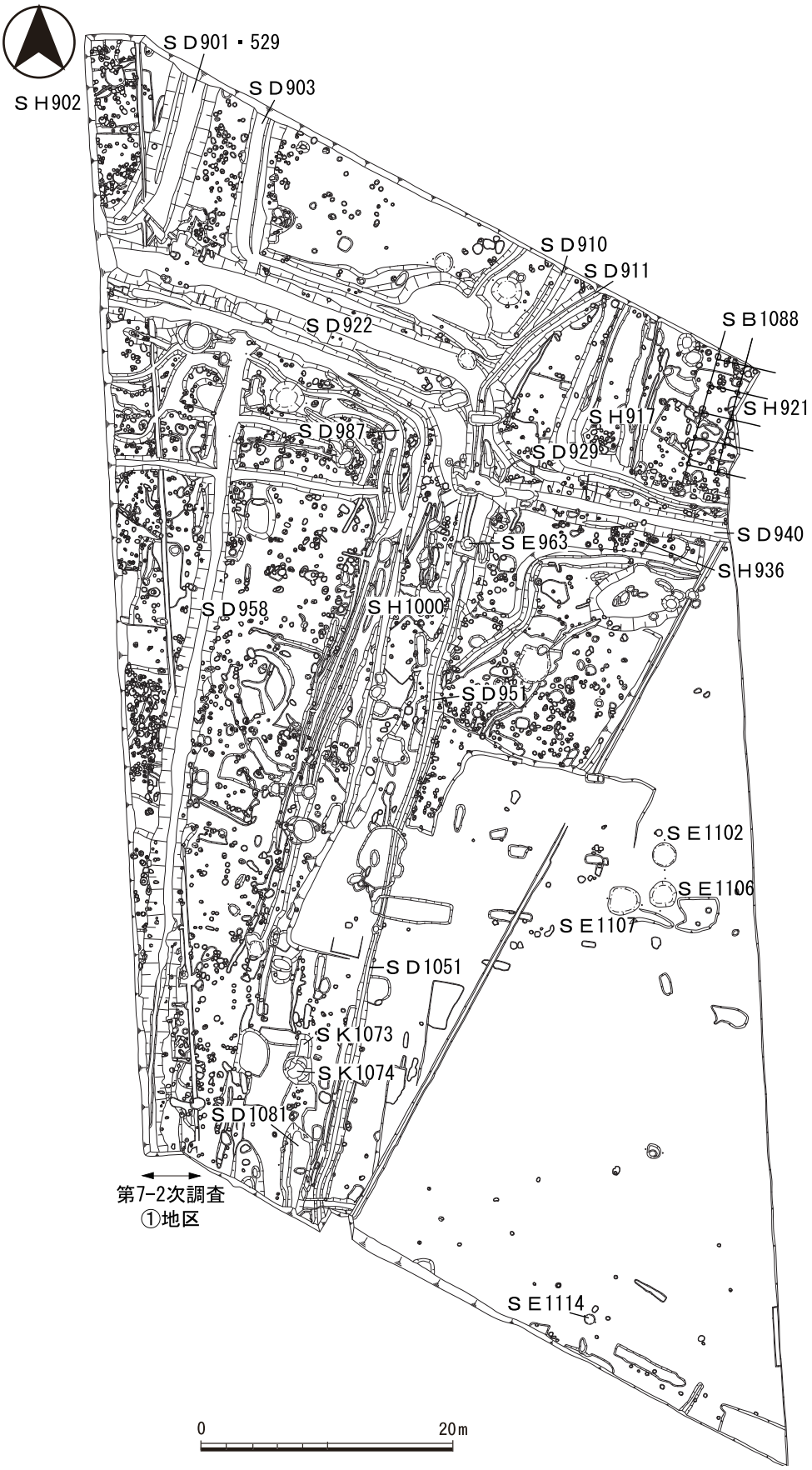
溝や土坑を検出した。当該期の遺構は、調査区の西部から南部に比較的多い。

ＳＤ958　南北方向の溝で、第７－２次調査①地区で確認したＳＤ501の延長である。幅約2.5m、深さ約0.7mで断面形状はＵ字形である。出土遺物は、ＳＤ501では土師質土器が大量に出土したが、ＳＤ958ではＳＤ501ほどの出土量はない。他に灰釉陶器や黒色土器、土師器杯等が出土している。また、最下層から平安時代中期の遺物が出土しており、平安時代中期と後期に掘削されたと考えられる。そのうち、最下層はＳＤ904へ続き、さらに北側の第６次調査で確認されたＳＤ42に続くと考えられる。

ＳＤ987　幅約1.0m、深さ約0.6mの幅の狭い溝である。東西に約8.8mほどのびたところで、約110度の角度で南に曲がる。周辺には時期が異なるがほぼ同規模の溝４条がほぼ並行にのびており、やはり南へ曲がっているものがある。出土遺物は黒色土器や土師質土器など平安時代中期から後期のものが多いが、平安時代末から鎌倉時代初頭に属する土師器皿も出土している。

ＳＤ1081　南端は調査区外にのびるが、長さ7.0m以上、幅約1.7m、深さ約0.6mである。平面形が楕円形に近いため、土坑である可能性もある。土師質土器や黒色土器、灰釉陶器等が出土しており、平安時代後期の遺構と考えられる。

ＳＫ1073　南側をＳＫ1074によって壊されており、全体は不明である。東西約1.2m、深さ約0.6mである。土師質土器台付皿が出土しており、またＳＫ1074でも多数の完形に近い土師質土器が多数出土し



第６図　木造赤坂遺跡第８次調査②③地区遺構平面図（１：500）

ていることから、集中的に捨てられたものと考えられる。平安時代後期の遺構と考えられる。

（４）鎌倉時代

多数の溝のほか、井戸や土坑を検出した。溝は後の室町時代のものより小規模なものが多い。また、出土遺物が最も多い時期である。

ＳＤ911　大きく上層と下層に分かれ、上層は幅約1.8m、深さ約0.5mとやや幅広く、下層は幅約0.6m、深さ約0.6mと細くて深い形状である。南側は上層がＳＤ922・951によって削平されているが、下層はＳＤ922・951の溝底に残っており、さらに南のＳＤ1051へと続く。土師器鍋や陶器椀、陶器皿などが出土しており、鎌倉時代前半と考えられる。

ＳＫ1074　ＳＫ1073の南側と重複するように掘削された土坑である。南北約2.1m、東西約2.0m、深さ約1.4mと深い。埋土は大きく２層に分かれ、比較的短期間に埋められたと考えられる。出土遺物は土師質土器台付皿や黒色土器が大半であるが、下層から陶器椀が出土していることから鎌倉時代の遺構と考えられる。

ＳＥ963　ＳＤ922の溝底中央に位置し、ＳＤ911下層の中央部に重複して掘削される。直径約1.4mの平面真円で、ＳＤ922の底から深さ約1.1mで砂層の底を確認した。陶器椀や土師器皿が出土しており、鎌倉時代後半から末と考えられる。

ＳＥ1102　長径約1.8m、短径約1.6m、深さ約2.7mである。土層観察から地山と酷似した土を一気に埋めたようである。陶器椀や土師器皿などが出土し、鎌倉時代末から室町時代初頭と考えられる。

ＳＥ1106　検出当初は直径約2.1mの半円形を平面にもつ遺構と判断していたが、南半分は地山と酷似した土を一気に埋めていることが分かり、円形の井戸であることが判明した。深さ約2.9mである。土師器鍋や皿、陶器椀等が出土しており、鎌倉時代末から室町時代初頭と考えられる。

ＳＥ1107　長径約2.2ｍ、短径約2.0ｍ、深さ約2.9ｍである。深さ約1.0ｍで砂層を確認したが、その下は粘土層が続く。常滑産の陶器甕や陶器椀、土師器皿などが出土した。

（５）室町時代

本調査区の中で、最も遺構の多い時期である。遺構は調査区の北半部に集中する。４箇所の区画溝を確認した他、多数の溝や井戸、土坑等を検出した。

ＳＢ1088　後述するＳＤ929によって形成される区画の中に位置する総柱建物である。調査区の北東隅に位置するため正確な規模は不明だが、桁行４間以上、梁間行２間以上になる。柱間隔は桁間約2.2m、梁間約2.4mである。土師器皿が出土している。

ＳＤ901　南北にのびる溝だが、西半分は近世の溝ＳＤ529によって壊されており、規模は不明である。南端は土坑によって壊されているが、第７－２調査①地区でこの溝の続きと考えられるＳＤ530がある

写真６　ＳＤ 958（南から）

写真７　ＳＫ 1073・1074（南から）

写真８　ＳＥ 1102・1106・1107（南から）

ことから、西へ曲がり、区画溝と考えられる。一方、北側は第６次調査で検出したＳＤ117下層に続く。遺物は土師器鍋や常滑産の陶器甕が出土した他、陶器椀（いわゆる山茶椀）が多数混入して出土した。

ＳＤ903・910　ＳＤ903は南北方向に約11.8ｍのびたところで東側へ約100°の角度で曲がる。逆にＳＤ910は南北方向に約6.8ｍにのびたところで西へ約110°の角度で西へ曲がり、この２条の溝で「コ」の字形の区画を形成している。ただし、ＳＤ910の西端はＳＫ925等と重複し、ＳＤ903も東端がやや南へ曲がっており、ＳＤ903とＳＤ910の接点はない。この区画地の規模は東西約27m、南北９ｍ以上である。南北にのびる部分の規模はＳＤ903が幅約2.2m、深さ約0.9m、ＳＤ910が幅約1.8～2.5m、深さ約0.6mである。一方、東西にのびる部分はＳＤ903が幅約1.2m、深さ約0.3m、ＳＤ910が幅約1.1m、深さ約0.25mといずれも南北方向のほうが規模が大きい。いずれの溝からも土師器鍋や陶器椀などが出土した。

ＳＤ922　調査区内で最も大きく、幅約3.4m、深さ約1.0mの区画溝である。東西方向に約28mのびたところで、南へ約95°の角度で曲がる。しかし、南北方向には約17.6mしかのびず、その先は前述したＳＤ911下層がさらに南へのびるだけである。出土遺物は陶器椀が主体であるが、瀬戸美濃産陶器、常滑産の陶器甕等、室町時代さらには江戸時代初め頃の遺物も数点出土している。

ＳＤ929　南北方向に約12.8mのびたところで、東へほぼ直角に曲がる区画溝と考えられる。また、南北方向にのびる部分は鎌倉時代の溝ＳＤ932とほぼ同一箇所を掘削している。さらに北側へのび第６次調査で検出したＳＤ９・10に続く。規模は南北方向にのびる部分で幅約2.8m、深さ約0.6m、東西方向にのびる部分で幅約2.0m、深さ約0.4mである。断面形状はＵ字形を呈する。陶器椀や土師器羽釜等が出土した。

ＳＤ940　ＳＤ929の南側に位置し、東西方向にのびる。幅約2.4m、深さ約1.1mで、断面形状はＵ字形である。最下層からは陶器椀など鎌倉時代以前の遺物のみが出土しているが、それより上層からは常滑産の陶器甕など室町時代の遺物が出土したことか

写真９　ＳＤ 529・901（南から）

写真10　調査区北部中央の区画溝（南から）

写真11　調査区北東部の区画溝とＳＨ917・921・926（南から）

写真12　調査区西部の区画溝（北から）

ら、少なくとも鎌倉時代と室町時代の２度掘削されたと考えられる。また、西端はＳＤ922と重複する。それより西側へは続かないことから、ＳＤ929によって形成される区画と関係がある可能性がある。

ＳＫ1114　直径約0.8ｍの土坑である。深さ約0.8ｍ以下から直径20㎝大の礫を多く含む砂礫層を確認した。深さ約0.9ｍまで掘削したが、さらに砂礫層が続く。土師器羽釜や鍋の破片が多数出土した。

ｃ　出土遺物（第７・８図）

（１）飛鳥・奈良時代

１は須恵器杯蓋で、擬宝珠つまみが貼付され、かえりの端部は接地しない。２は土師器杯で、内面は放射状暗文、外面は横方向にミガキが施される。４は土師器椀で、外面はユビオサエ後ヨコナデが施される。

（２）平安時代

５・15・19・21・27は土師質土器の台付皿である。６・14・18・20は土師質土器の椀である。いずれもロクロナデが施され、底部外面には糸切り痕が残る。７は土師器杯で、内面は放射状と螺旋状の暗文がみられ、外面はヨコナデが施される。８は高台と皿部とを連結成形するいわゆる柱状高台付小皿である。11は灰釉陶器椀で、底部外面に糸切り痕が残り、高台も退化している。13は須恵質の壷である。16・17は黒色土器椀で、17には高台がつく。いずれも内面のみ黒化されている。

（３）鎌倉時代

22は南伊勢系土師器皿である。色調は灰白色で、内外面はユビナデ後ナデが施される。23・24・26は陶器椀で、藤澤編年の第５型式[②]（12世紀末～13世紀前半頃）のものである。25は土師器小皿である。色調は灰白色で、ナデやオサエが施される。28～58は室町時代の遺構から出土したものであるが、陶器椀を中心とする鎌倉時代の遺物が多く含まれている。陶器椀は藤澤編年の第５～６型式（13世紀前半頃）に相当するものが多い。また、34・54・55には底部外面に墨書が認められる。34は陶器小皿で、底部外面に「十」と書かれている。54には「十」、55には「什」と思われる文字が書かれている。

（４）室町時代

29・33・36・39・51は南伊勢系の土師器鍋である。伊藤裕偉氏による編年の第４段階[①]（15世紀後半から16世紀頃）に相当する。30は南伊勢系土師器小皿で、色調は浅黄橙色である。32・47・52・53・58は土師器羽釜である。32は成形時の口縁端部を外側へ大きく折り返している。他は口縁端部を折り返さず、端部上面に面をなす。41は古瀬戸期の陶器平椀である。内面全体と外面の口縁部から体部上半にかけて釉が施されるが、外面体部下半はロクロケズリである。42は常滑産の陶器鉢である。43・50・57は常滑産の陶器甕である。成形時の口縁端部は「N」字が完全につぶれ、頸部と密着している。56は古瀬戸期の陶器で、根来形瓶子の可能性がある。外面には鉄釉もしくは褐釉が施される。

（５）土製品・石製品・瓦・銅製品

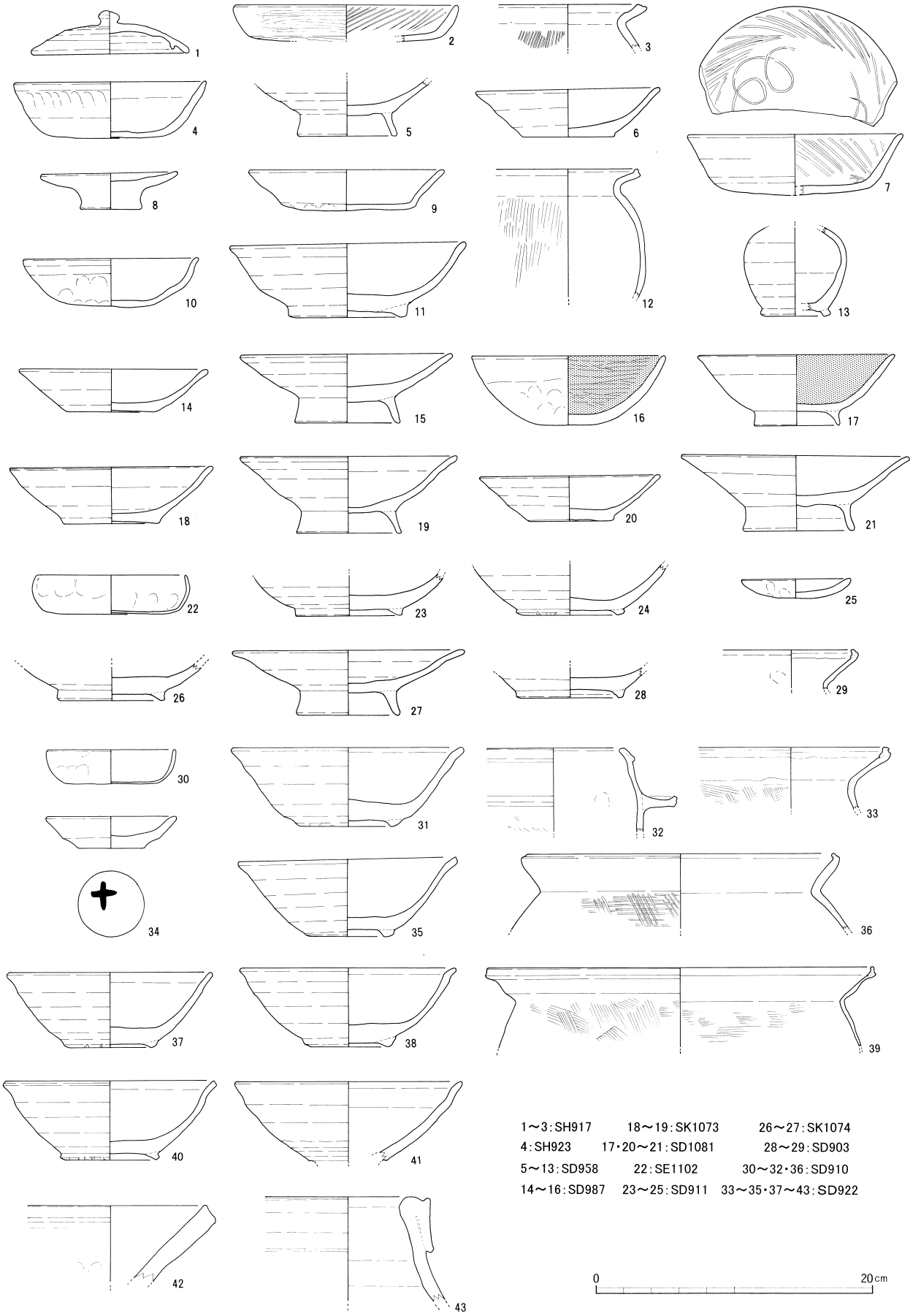
59は土製の紡錘車で、直径3.6㎝である。60は石製の勾玉で、端部が一部欠けているが、長さ4.4㎝以上、厚さ0.5㎝程度の薄いものである。端部近くに直径0.1㎝の透かし穴が穿たれている。61は石製の紡錘車で、直径4.7㎝である。62・63は土錘である。62は長さ5.9㎝、重さ41.4ｇ、63は長さ6.9㎝、重さ27.0ｇである。64は石斧である。65は軒平瓦である。内区に均正唐草文、外区に線鋸歯文を配し、無顎である。文様の下に木目が認められることから、古い笵が使われたようである。内面には糸切り痕が残り、外面は削られている。藤原宮式[④]に属すると考えられ、奈良時代後半頃のものと思われる。66は銅製の切羽台である。長さ5.0㎝、幅2.3㎝、厚さ0.8㎝である。

４　まとめ

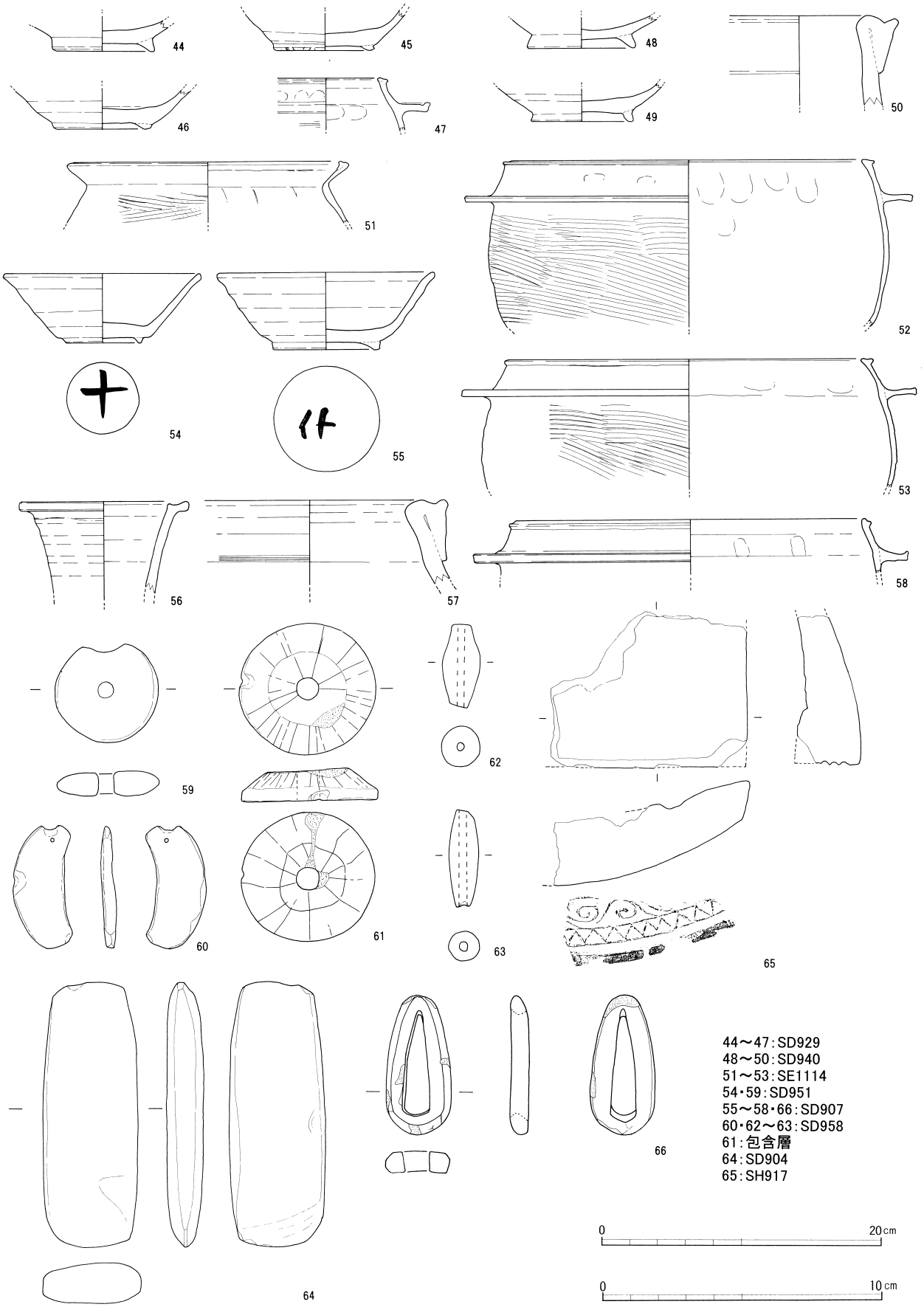
以下、調査成果を時代順に述べ、まとめとする。

（１）弥生時代

第８次①地区で確認されたＳＤ805については、方形周溝墓の周溝の可能性を指摘した。昭和38年に行われた第１次調査では、弥生時代後期から古墳時代にわたる竪穴式住居や溝が確認され[⑤]、平成３年度の県一般農道改良工事に伴う第２次調査では、弥生時代後期の土器群や溝が確認されている[⑥]。昭和38年度の調査地は第８次調査①地区から南東へ約300ｍのところにあたり、第２次調査もこれより近い地点である。昨年度の調査を含め、弥生時代後期頃に人々



第７図　木造赤坂遺跡第８次調査②③地区出土遺物実測図①（１：４）



第８図　木造赤坂遺跡第８次調査②③地区出土遺物実測図②（44 ～ 58・64 は１：４、59 ～ 63・65・66 は１：２）

がこの周辺で生活していたことは明らかである。しかし、これまでの調査では居住地はあるものの「墓」の存在がなく、今回の調査結果は、可能性に留まるものの当該期の資料を補うものと考えられる。

（２）古墳時代

竪穴住居１棟、土坑１基を検出したのみである。第８次調査②地区の北側にある第６次調査区では、南部で当該期の竪穴住居や掘立柱建物を確認しており、南側にある第７－２次調査②地区では濃密な竪穴住居群が確認されている。しかし、第８次調査②地区は、これらの調査区の間に位置するにもかかわらず、当該期の遺構が非常に希薄であることが指摘できる。

（３）飛鳥・奈良時代

第８次調査②地区北半部において竪穴住居を少なくとも６棟確認した。第６次調査では調査区のほぼ中央で当該期の集落を確認しており、さらに北側でも遺構が散在している。しかし、第７－２次調査②地区では、掘立柱建物が２棟確認されたにすぎない。したがって、当該期の集落は小規模な集落が散在していたと考えられよう。

（４）平安時代

第８次調査②地区で検出したＳＤ958は第７－２次調査①地区で検出されたＳＤ501の続きである。ＳＤ501は当初第７－２次調査①地区のＳＤ524と接続して区画溝となると考えられていたが、ＳＤ958の最下層は西へ曲がることなく北側のＳＤ904と接続し、さらに北へのびることが確認された。またＳＤ524の東側は多数の遺構が重複しており、ＳＤ524がどこまで延長するのかは明らかにし難い。一方、ＳＤ987は小規模ながらも区画溝と考えられる。ＳＤ987の南北にのびる方向はＳＤ958と並行しており、ＳＤ958を基準として掘削された可能性が高い。また、ＳＤ987に近接するようにほぼ同規模の溝が鎌倉時代から室町時代に掘削されている。このことから平安時代末から室町時代にかけてこの地を区画する必要性があったことを示しているだろう。

（５）鎌倉時代

調査区全域で当該期の遺構を確認したが、大部分が溝や井戸であり、掘立柱建物は第８次調査①地区で１棟が確認されたのみである。また、第６次調査で確認された区画溝ほど規模の大きなものはないが、ＳＤ968のように小規模ながら屈曲する溝が確認されている。他にも室町時代の区画溝と非常に近接、あるいは重複したところに掘削された当該期の溝が多数存在し、室町時代の区画溝形成の基礎となっていることが容易に推測できる。また、全体の出土遺物の中でも陶器椀をはじめとする当該期の遺物が最も多い。このことから、後世の遺構によって壊された遺構が存在したのか、あるいは近隣に鎌倉時代の大規模な集落が広がっていた可能性がある。

（６）室町時代

第８次調査②地区では４カ所の区画地を確認した。このうち２カ所は北側の第６次調査で確認された区画地と接続する。さらに区画内部に掘立柱建物が１棟が確認された。今後も他の調査区を含めた居住域の検討が必要である。また、区画溝の中でも規模の大きなＳＤ903・910・922・929はいずれも南北方向にのびる溝の方が東西方向よりも規模が大きく、東西を区画することが重視されていたことが窺える。

３次にわたり約26,700㎡という広大な面積を対象に調査を行ったが、その中で区画の実例がわかる良好な資料を得られたことは大きな成果である。

【註】

① 伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』vol.1 三重歴史文化研究会　1990）
　〃　「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『鍋と甕そのデザイン』第４回東海考古学フォーラム 1996 年
② 藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号 三重県埋蔵文化財センター 1994 年
③ 伊藤裕偉「中世成立期における伊勢の土器相～雲出島貫遺跡出土資料を中心に～」『嶋抜』Ⅱ　三重県埋蔵文化財センター 2000
④ 稲垣晋也「東海道古瓦の系譜（一）―伊賀・伊勢・志摩―」『皇學館大学史料編纂所論集』、皇學館大学史料編纂所 1989 年
⑤『久居市史上巻』 久居市史編纂委員会　1972
⑥ 三重県埋蔵文化財センター『平成３年度三重県埋蔵文化財センター年報４』 1993

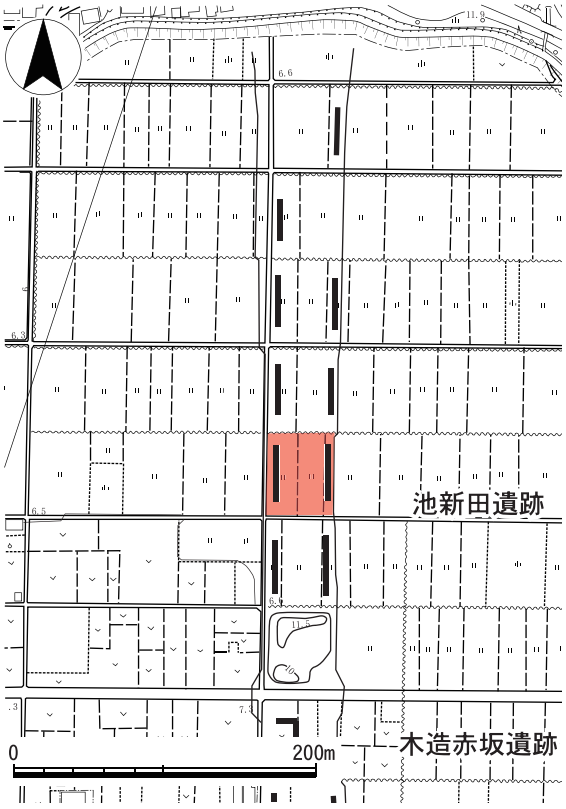
Ⅲ　池新田遺跡（第２次調査）

１ はじめに

池新田遺跡は津市木造町字池新田に所在し、雲出川下流左岸の木造赤坂遺跡が立地する低位段丘とその北部の高茶屋台地に挟まれた谷部に位置している。現況は水田が広がっている。

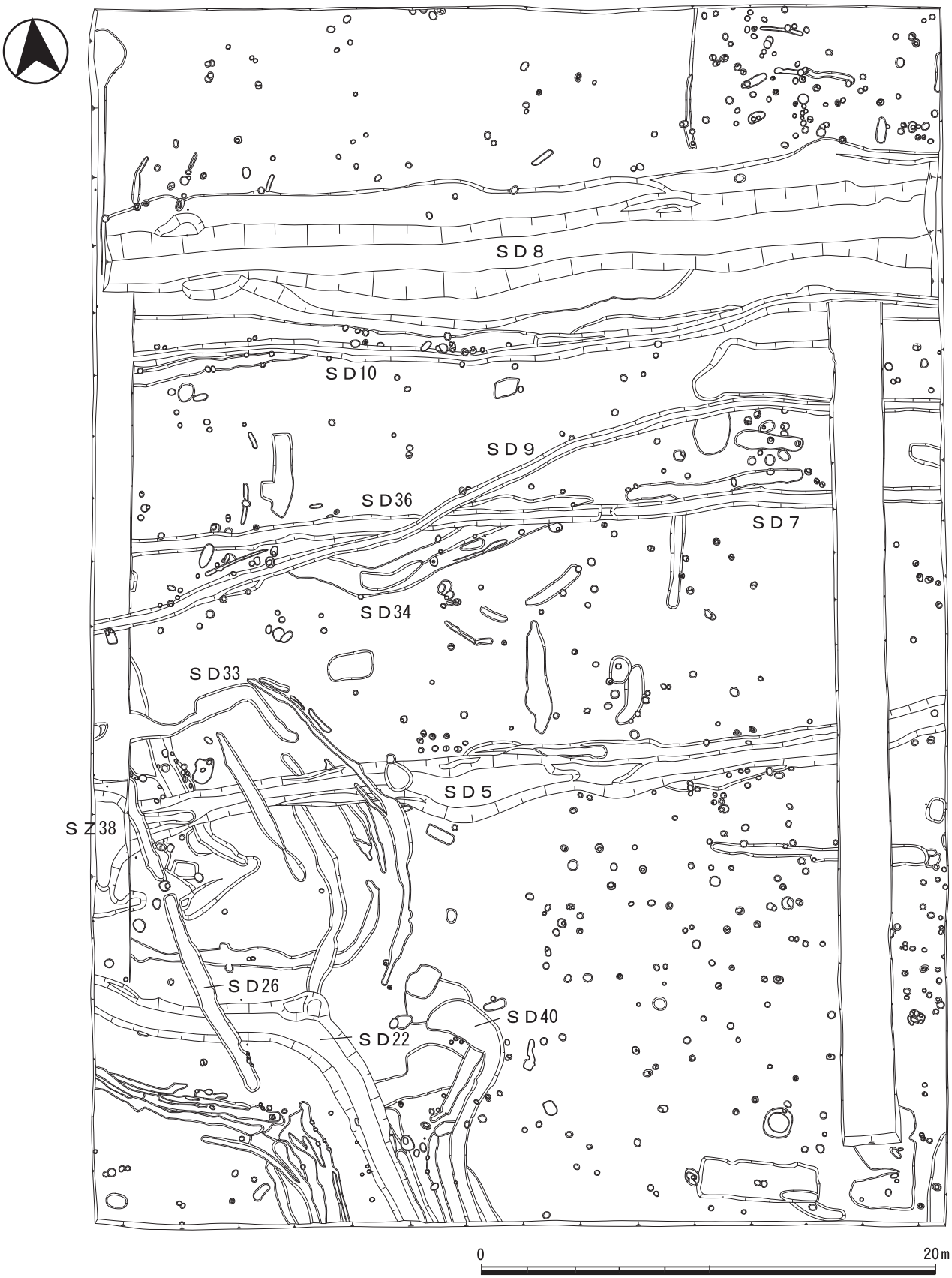
平成16年度に実施された第1次調査では、トレンチ１・２で中世以降と思われる溝が検出され、土師器・陶器などの遺物が出土している。これより以北は沼地状になっており、遺構・遺物は確認されなかった[①]。

この結果を受けて、第2次調査は1,961㎡を対象として行った。基本層序は第Ⅰ層：表土・耕作土、第Ⅱ層：褐灰色砂質土、第Ⅲ層：黒色粘質土、第Ⅳ層:黄褐色粘質土である。第Ⅱ層は包含層に相当し、第Ⅲ層はいわゆる黒ボクで、遺構はすべて第Ⅲ層より切り込んでいる。ただし、第Ⅲ層が削平によるのか確認できない部分もあり、第Ⅳ層で検出した遺構もある。



第９図　池新田遺跡調査区位置図（１：5,000）

写真13　調査区全景（南から）



第 10 図　池新田遺跡遺構平面図（1：250）

２ 遺　構（第10図）

池新田遺跡で検出した遺構は、古墳時代前期と中世のものがある。以下主な遺構について概述する。

ａ　古墳時代前期

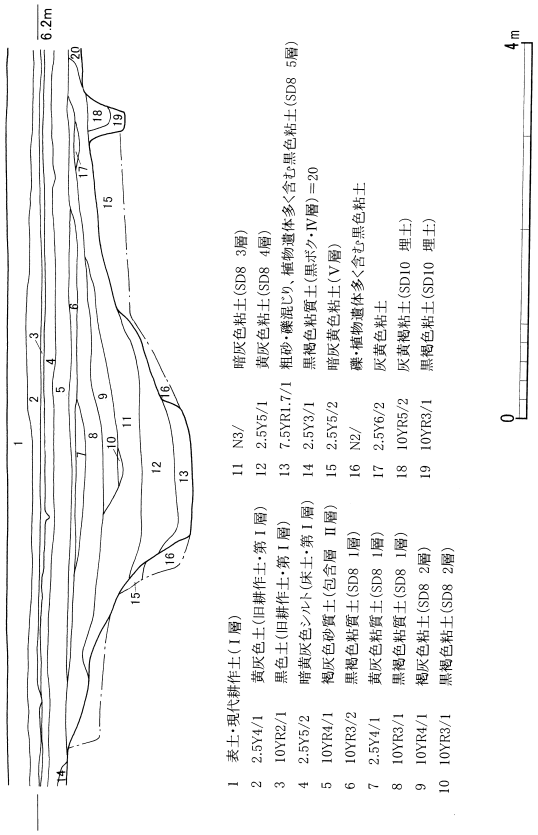
ＳＤ８（第11図）　調査区北部で検出した溝である。上層は幅８ｍ程の中世までの遺物を含む落ち込みとなっているため規模は判然としないが、機能時には幅約４～６ｍ、深さ約1.４ｍの溝であったと考えられる。埋土はおよそ５層に分層することができる。１～３層はＳＤ10を含めて上面を覆っており、幅８ｍ程の落ち込みとなっている。１層には中世までの遺物が含まれるが、２・３層は暗灰及び黄灰色の粘土層で、遺物はほとんど含まれない。４層は黄灰色の粘土層で遺物は含まれず、古墳時代前期の遺物は多量の植物遺体とともに５層から出土している。出土遺物（１～21）は土師器壺・甕・高杯などがあり、赤彩が施されたもの（３～５・20）も出土している。土層観察では砂がほとんど確認できないことから、流れはほとんど無く、徐々に埋没していったものと考えられる。

ＳＤ10（第11図）　調査区北部、ＳＤ８の南で検出した溝である。出土遺物はあまり多くないが、最終的にＳＤ８を覆う中世の遺物を包含する層より下で検出されていることから、ＳＤ８と同時期に機能した遺構と考えられる。幅約0.６ｍ、深さ0.５ｍで、箱状に深く掘られた溝であり、調査区内では接続しないもののＳＤ８からの導水路として機能していた可能性がある。

写真14　ＳＤ８・10（西から）

写真15　ＳＤ８東壁土層断面（西から）

写真16　ＳＤ10東壁土層断面（西から）



第11図　ＳＤ８・10東壁土層断面図（１：80）

b　中世

検出した中世の遺構には、中世墓・溝・池状遺構などがある。また掘立柱建物を抽出することはできていないが、多数存在するピットもこの頃のものと考えられる。遺物は平安時代後期～鎌倉時代の遺物がほとんどである。

ＳＸ６（第12図）　調査区の東端で検出した中世墓である。1.1ｍ×0.7ｍの隅丸方形を呈し、深さ0.2ｍである。西端で土師器皿４枚（31～34）と土師器小皿９枚（22～30）が、東端で陶器椀１点（35）が出土した。土師器皿は４枚が方形に正位に並べられ、小皿は土師器皿の下に３枚ずつ重なって出土しているもの、土師器皿の横に３枚重なっているもの、土師器皿の下に２枚重なり、その皿の上に１枚が伏せられた状態で出土しているものがある。意図的に置かれたものと思われる。

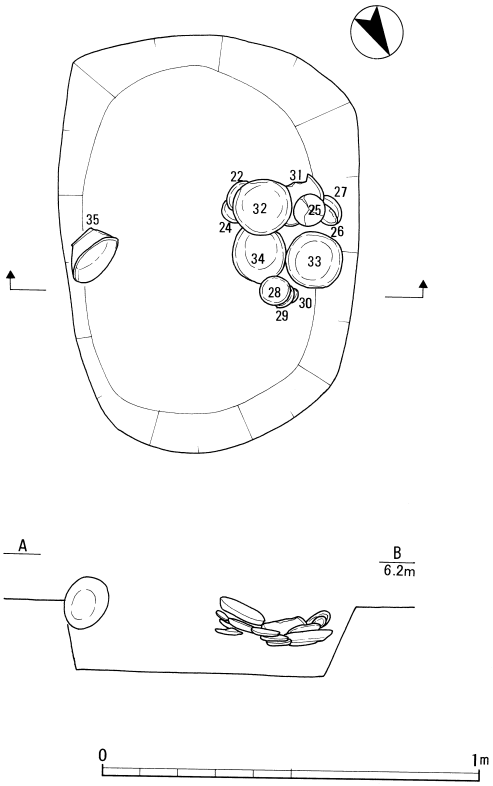
ＳＺ38　調査区西端で検出した池状遺構である。遺構の東端の一部のみを検出と考えられるが、現状で南北約６ｍ、東西1.7ｍ以上、1.0ｍ以上の落ち込みである。上層で板材が出土しており、底に杭が打たれた状態で出土した。遺構の性格は不明であるが、湧水や流れ込みが見られることから、水に関わる何らかの役割を果たしていたと考えられ、池状遺構とした。後述する理由から、ＳＤ22と同時期かそれ以前には成立していたと考えられる。

ＳＤ５　調査区中央で検出した調査区を東西に走る溝である。幅1.6～3.0ｍ、深さ0.4～0.7ｍで、他の溝よりも規模が大きいものである。中央部から東に向かって幅広く深く掘削されており、埋土には砂が多く含まれていることから、西から東へ流れのある溝であったと考えられる。ＳＺ38との接続付近が後の時代のＳＤ28や範囲確認調査坑と重なっており、切り合い関係は確認できなかったが、ＳＤ５はＳＺ38に向かって浅くなっており、ＳＺ38からＳＤ５に向かって水が供給されていたものと考えられる。

ＳＤ７・36　調査区中央で検出した調査区を東西に走る溝である。ＳＤ５から約10ｍ北に離れて平行して位置する。調査区中央部で浅くなり、途切れることが確認された。東側のＳＤ７は幅約0.6ｍ、深さ約0.3ｍ、西側のＳＤ36は幅約0.9ｍ、深さ約

写真17　ＳＸ６作業風景

写真18　ＳＸ６遺物出土状況（西から）



第12図　ＳＸ６遺物出土状況図（１：20）

0.4ｍである。

ＳＤ９　調査区中央で検出された溝である。東側ではほぼ東西方向であるが、中央付近から西に向かっては南へ20度ほど傾く方向をとる。幅約0.7ｍ、深さ約0.3ｍである。重複関係からＳＤ36より新しい時期の地割りを表しているものと考えられ、調査区外であるが、木造赤坂遺跡第７－１次調査①地区から続くＳＤ22（木造赤坂遺跡第７－１次調査①地区ＳＤ354）の屈曲部より南側の方向とほぼ直交している。

ＳＤ354からは、底部に墨書のある山茶椀が一定量出土しており、鎌倉時代の地割りを示していると考えられる。地籍図と照らし合わせると「字柿木垣内」と「字コウ田」の字境とほぼ一致しており[②]、字境の溝と考えられることから、池新田遺跡周辺の地籍図の地割りは、鎌倉時代にまで遡るものと考えられる。

ＳＤ22　木造赤坂遺跡第７－１次調査①地区から続く溝である。幅約2.0ｍ、深さ約0.5ｍ程の溝であるが、調査区南部では幅約9.0ｍ、深さ最大0.2ｍ程の落ち込み（ＳＤ16）を掘削後検出できた。南部は、ほぼＳＤ９と直交する方向で検出されるが、途中で西方向に曲がることが確認された。これは地籍図とほぼ一致するものである[③]。

道路状遺構　ＳＤ22は調査区南西部で屈曲するが、南西側ではそれと方向を同じくする溝状の落ち込みが存在する。またＳＤ22の屈曲部からはそこから分岐して弧状に北西方向にのびる溝状の落ち込みが存在する。これらの溝は掘削当時は意識していなかったが、ＳＤ16の埋土と同様の砂質土が不規則に入り込んだもので、非常に浅く、底は凸凹しており、途中で途切れるなど溝としての機能は果たしていないと考えられる。ＳＤ22と南西側の溝状の落ち込みは地籍図で表された道路と一致しており、道路遺構の痕跡であると考えられる。また北西にのびる落ち込みも同様の形態をしており、道路遺構と考えられる。この２股に分かれた中央部には池状遺構ＳＺ38が位置しており、これを避けるように道が敷設された可能性が考えられる。

写真21　ＳＺ38作業風景

写真22　ＳＺ38西壁土層断面（南東から）

写真23　ＳＤ７・９（東から）

写真24　ＳＤ22と道路状遺構（南から）

３　出土遺物（第 13 図）

出土遺物は、ＳＤ８下層から古墳時代前期の遺物が出土しているが、中世と考えられる遺構からはあまり遺物は出土しておらず、全体的に出土量は少ない。また、遺構は確認されていないものの木造赤坂遺跡同様、縄文時代晩期の突帯文土器が一定量出土している。ここではＳＤ８下層出土遺物とＳＫ６出土遺物を掲載した。

ＳＤ８下層出土遺物（１～ 21）

ＳＤ８から出土した壺は大半が広口壺であり、若干の二重口縁壺が含まれる。広口壺には、頸部が緩やかに外反するもの（１・２・８）、直線的に上方に伸び外に開くもの（３・４・５・７）がある。３・４・７は赤彩が見られる。

甕には、く字型甕（９）が若干見られるが、大半はＳ字状口縁台付甕[4]（10 ～ 14）である。一部に口縁端部に押し引き刺突文が見られるＡ類に属すると考えられるものも見られるが、Ｂ類の新段階及びＣ類が主体であると考えられる。

15は、受部と脚部が貫通しない小型器台である。丁寧なヘラミガキがされ、口縁部端部には簾状文が施されている。

16 ～ 18は高杯である。いずれもヘラミガキが施されている。出土した高杯はいずれも丁寧に作られている。

20は、小型の鉢。風化が激しいが、表面には赤彩の痕跡が見られる。

21は、直径８㎝の土製の円形加工品で、中央に孔が穿かれる。紡錘車と考えられる。表面と側面にミガキが施される。

ＳＫ６出土遺物（22 ～ 35）

鎌倉時代の遺物である。土師器小皿（22 ～ 30）と皿（31 ～ 34）はいずれも同様のつくりがなされており、口縁部外面に幅広いヨコナデが施されている。小皿は口径８～９㎝、器高 1.2 ～ 1.5 ㎝、皿は口径約 15 ㎝、器高 2.5 ～ 3.0 ㎝で、いずれも作りは粗く、隅丸方形に近いいびつな形になっている。35 は陶器椀であり、渥美型５型式[5]（13 世紀前半頃）と考えられる。

４ まとめと今後の課題

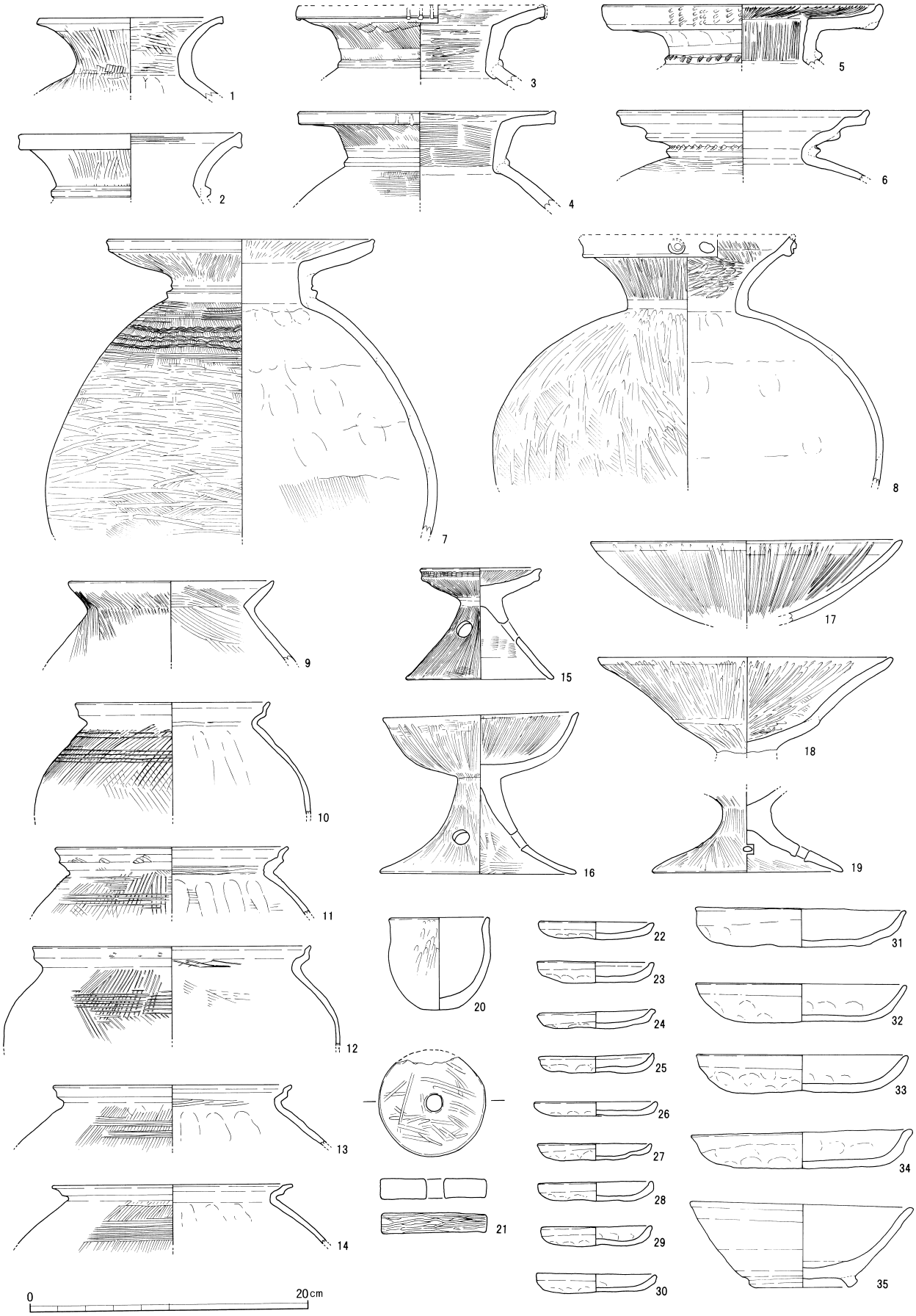
池新田遺跡では古墳時代前期と中世（平安時代末期から鎌倉時代前期頃）の遺構、縄文時代晩期・古墳時代前期・古代・中世の遺物が出土している。周知の遺跡としては須恵器の出土が知られているが、今回の調査では１点も出土しなかった。

今回の調査で特に注目されるのは、古墳時代前期の遺構であるＳＤ８が確認されたことである。木造赤坂遺跡では第８－１次調査区から方形周溝墓の可能性のある遺構（ＳＤ805）が確認されているのみで、他の地区ではあまり明瞭にはなっていない時期であり、新たな知見となった。一部の土器には朱彩がみられるものも存在しており、何らかの祭祀が行われた可能性も考えられる。

木造地内には、所在は明らかではないが前期古墳と考えられる木造大塚山古墳・木造里中古墳がかつて存在したと考えられており[6]、また台地上ではあるが池新田遺跡を見下ろす向山遺跡で当時期に近い時期と考えられる方形周溝墓が確認されている[7]。周辺には舞出北遺跡[8]や雲出島貫遺跡[9]、前田町屋遺跡[10]などで古墳時代前期の墳丘墓の存在が明らかになっており、また雲出島貫遺跡では竪穴住居等も確認されていることから、周辺に同時期の集落が展開しているものと考えられる。

縄文晩期の遺構は確認されなかったが、突帯文土器が遺構埋土や包含層から一定量出土している。縄文晩期の土器は木造赤坂遺跡や井手ノ上遺跡からも一定量出土しており、木造赤坂遺跡第７－２次調査②地区や井手ノ上遺跡では竪穴住居なども確認されている。木造赤坂遺跡の北部でも遺構は確認されていないが、当遺跡周辺にまで当時の集落が広がるものと考えられる。

中世では、中世墓と考えられる土坑を検出した。完形の土器を多数埋納しており、中世墓と判断した。検出したのが調査区の東端であるためはっきりとはしないが、周囲には同時期の墓と考えられるような遺構は確認されておらず、単独で造られた、屋敷墓に類するものと考えられる。周辺では建物としてまとめることはできなかったものの多数のピットが確認されており、幾つかの建物が存在したものと推定



第13図　池新田遺跡出土遺物実測図（1：4）

される。隣接する木造赤坂遺跡第７－１次調査①地区では、今回の調査で延長が確認できたＳＤ22のほか、井戸や溝が確認されており、周辺に当時の生活域が存在したものと考えられる。池新田遺跡では、遺物からは時期差はほとんど確認できないが、ほぼ東西方向の溝とＮ20°Ｗの溝が確認され、当時の地割りを現しているものと考えられる。重複関係から後者が前者より新しい地割りであることが確認できる。この方向の溝は概ね地籍図に現れるものと一致しており、地籍図と同様の地割りが当遺跡では鎌倉時代にまで遡るものと考えられる。

ＳＤ22の南西側には、規模の小さな溝状の落ち込みが見られる。溝として遺構掘削を行ったが、遺構埋土は一様ではなく、凸凹したような状況で検出していることから道の痕跡の可能性が考えられる。同様の小規模な溝状の落ち込みがＳＺ38を迂回するように北に向かってもみられ、道路の痕跡である可能性がある。ＳＺ38は調査区南西部で東側の一部を検出したのみと考えられるが、底部に数本の杭が打たれている状況が確認でき、池のような遺構であったと考えられる。

池新田遺跡からは古墳前期以降平安時代後期まで遺物・遺構はまったく確認できていない。文字通り「池」のような湿地化した状況で、生活域として適していなかったものと思われる。調査区は地籍図からはＳＤ９より南が「字柿木垣内」、北が「字コウ田」にあたり、中世以降居住域・水田として土地利用がされるようになったのであろう。この地割に先行する溝が見られることから、平安時代後期頃からこの土地が利用され始めてＳＤ５やＳＤ７が掘削され、鎌倉時代になって新たにＳＤ9やＳＤ22の地割りに変更し、後の時代までその地割が存続したものと考えられる。

【註】

①「Ⅳ　池新田遺跡・赤坂遺跡・井手ノ上遺跡範囲確認調査」『一般国道23号　中勢道路　埋蔵文化財発掘調査概報』17　三重県埋蔵文化財センター　2006
②地籍図（明治30年度作成）及び太田光俊「木造地区の歴史的調査（木造荘中世資料調査）の報告」『第2回上野遺跡シンポジウム「木造氏と上野遺跡」』三重大学上野遺跡学術調査研究会・久居市教育委員会　2004　附表１～４を参考にした。
③ ②と同じ
④ Ｓ字甕の分類は、赤塚次郎「Ⅴ 考察」『廻間遺跡』財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1990　による
⑤藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第３号　三重県埋蔵文化財センター　1994
⑥鈴木敏雄「考古学から見た一志郡」『一志郡史』下巻一志郡町村会　1955
久居市教育委員会『三重県久居市　遺跡分布地図』1994
⑦当概報掲載
⑧「Ⅱ　舞出北遺跡」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』ⅩⅢ　三重県埋蔵文化財センター　2001
「Ⅲ　舞出北遺跡（第３次調査）」『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報』17　三重県埋蔵文化財センター　2006
⑨『嶋抜－第１次調査－』三重県埋蔵文化財センター　1998
『嶋抜Ⅱ』三重県埋蔵文化財センター　2000
『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター　2001
⑩『前田町屋遺跡（第１次）発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター　1997
『前田町屋遺跡　第２次－前田地区・大明神地区』三重県埋蔵文化財センター　1999

Ⅳ　向山遺跡（第４次）

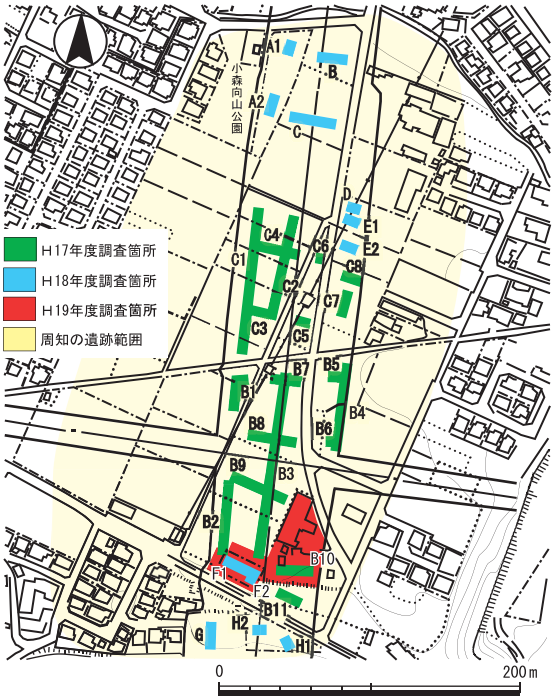
１　はじめに

向山遺跡は津市高茶屋小森町に所在し、高茶屋台地と呼ばれる雲出川左岸の中位段丘面南辺に立地する。遺跡の東側には南に向かって開口する小さな谷があり、南と東に向かって緩やかに傾斜する。今年度の調査区は、遺跡の南端にあたる。現況は荒れ地で、周辺は果樹園と宅地が広がる。

周辺遺跡として台地上の約1.5㎞東方に埋納状況は不明ながら２個体以上の銅鐸が出土した四ッ野Ｂ遺跡が所在する。[①] 平成４・５年度に津市教育委員会が発掘調査を実施し、80棟を越える弥生時代後期から古墳時代中期の竪穴住居等が検出されている。[②]

向山遺跡は平成６年度に津市教育委員会によって第１次調査が実施され、縄文時代から古墳時代の遺構・遺物が確認されている。[③] 中勢道路建設に伴う調査は平成17・18年度に第２・３次調査が実施され、溝や土坑等の遺構を検出し、縄文土器や須恵器・土師器等が出土している。[④]

第４次調査は、第２・３次調査の結果を受け、2,393㎡の面積を対象に実施した。



第14図　向山遺跡調査区位置図（1:5,000）

写真25　方形周溝墓群（西から）

２　遺　構（第15図）

今回の調査では、方形周溝墓が９基確認された。供献された遺物は出土しなかったが、以下に述べる溝の繋がりや途切れる状況・周溝の形態等から検討すると、弥生時代後期から古墳時代初頭に築造された方形周溝墓との類似点が多く見いだせることから、向山遺跡の方形周溝墓はこの時期に築造されたものと考えられる。

これらの方形周溝墓の盛土や主体部はすでに削平されており、すべての方形周溝墓において墳墓を取り囲む周溝のみ検出された。それぞれの方形周溝墓は近接し、その周溝は共有したり、重なり合ったりしている。また、周溝が辺の中央や隅で途切れ、陸橋を有するものが多い。

周溝の内側はほぼ直線的で、傾斜は墳丘に対して急に立ち上がる。一方、外側は弓なりに弧を描き、傾斜は内側に対して緩やかである。

基本層序は、上層から表土（耕作土）、暗灰黄色粘質土、明黄褐色粘質土（地山）である。遺構検出は明黄褐色粘質土上面で行った。現地表面は地山とともに、北から南東方向へ傾斜し、調査区北と南との高低差は約1.6ｍになる。

以下、主なものについて概述する。

ＳＸ１　調査区東部で検出した。東西10.7ｍ、南北10.0ｍの規模をもつ。

周溝は南北辺のそれぞれ中央部で途切れ、陸橋をもつ。西辺周溝は検出面で幅約3.3ｍ、深さ約0.6ｍを測る。北辺周溝は大きく膨らんでおり、陸橋部東側で幅約4.8ｍになる。

陸橋西側の周溝には、これと重複する新しい時代の溝が存在しており、陸橋部分に近い地点から７世紀後半の須恵器長頸壷や土師器高杯が出土した（第16図５・１）。また、陸橋部東側の周溝からも須恵器高杯（第16図３）が出土した。

ＳＸ３　調査区南東部、ＳＸ２の西側で検出した。南側は明治時代以降に削平され崖になっており、周溝はごく一部しか遺存していない。また、北辺周溝は後述するＳＸ４と、西辺周溝はＳＸ５とそれぞれ重複する。

平面形は正方形に近い形状をなし、東西・南北ともに溝の内法で約7.6ｍの規模をもつ。周溝の断面形状は逆台形をなし、東辺周溝で幅約１ｍ、深さ約0.4ｍである。

ＳＸ５との前後関係は、重複する西辺周溝の両側とも傾斜が緩やかになっていることや、土層断面に明確な前後関係が認められないこと等から、先に築造された方形周溝墓の周溝が完全に埋没していない段階で、溝を共有させて新たな周溝墓を隣接して築造されたものと考えられる。

周溝からは縄文土器片が出土したが、これは混入品である。

ＳＸ４　調査区中央部、ＳＸ１の西側で検出した。ＳＸ４の東辺周溝は重複するＳＸ１の西辺周溝を利用していることから、ＳＸ１より後に築造されたものと考えられる。

周溝の内法で東西約９ｍ、南北約10.2ｍの規模をもつ。周溝の断面形状はU字型である。西辺周溝は幅約２ｍ、深さ約0.4ｍである。ＳＸ１同様、北辺周溝は大きく膨らみ、幅は約3.8ｍになる。

周溝は北東隅と南東隅の２カ所で途切れ、北西隅で細く浅くなり、最も細いところは幅約0.9ｍ、浅いところで深さ約0.1ｍになる。

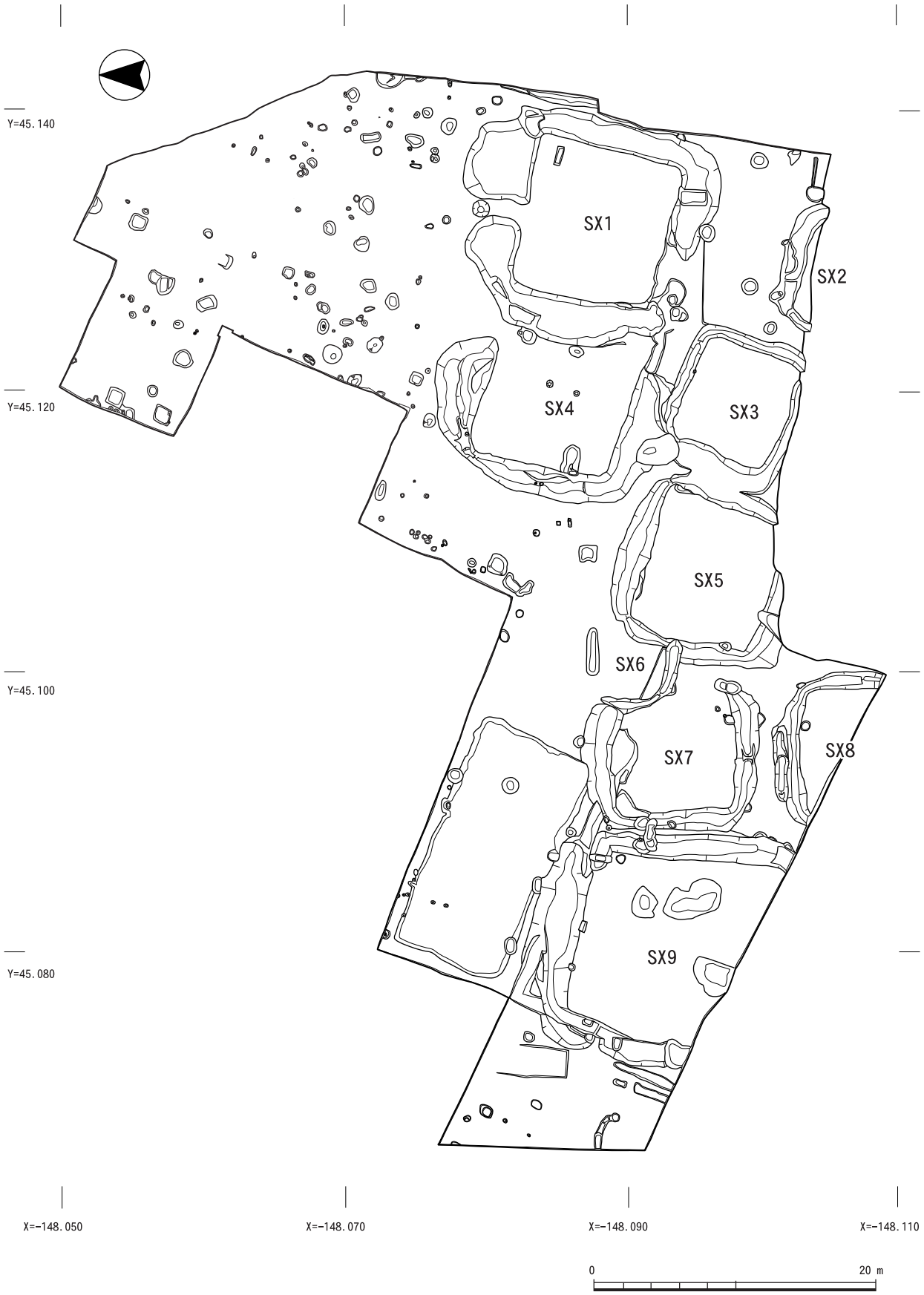
北辺周溝の大きく膨らんだ部分からは須恵器高杯（第16図10）が出土した。

ＳＸ６　調査区中央部で検出した。今回の調査で検出された方形周溝墓の内、最も規模の小さいものである。

規模は周溝の内法で東西約4.2ｍ、南北約4.7ｍである。周溝の断面形状は逆台形で、北辺周溝は幅約0.8ｍ、深さ約0.6ｍである。周溝は北辺の両隅が途切れ、南西隅では細くなり緩やかなカーブを描いて南辺周溝に向かって深くなる。南東隅でＳＸ５と重複し、これより新しいことが確認されている。また、東辺はＳＸ５の西辺周溝を利用している。

西辺・南辺周溝からは、土師器小片が出土している。

ＳＸ７　調査区中央部、ＳＸ６の東側で検出した。規模は周溝の内法で東西約8.3ｍ、南北約8.6ｍである。周溝の断面形状はU字型をなし、南辺周溝は幅約1.4ｍ、深さ約0.3ｍである。南辺周溝に比べ北辺周溝の幅がわずかに広く約2.2ｍ、深さ約0.4



第15図　向山遺跡遺構平面図（1：400）

mになる。

周溝は南東隅で途切れ、陸橋を有し、東辺はＳＸ６の西辺周溝を利用している。こうした状況から、ＳＸ６より後に築造されたものと考えられる。また西辺周溝は後述するＳＸ９の東辺周溝と重複する。土層断面の観察から、ＳＸ７の周溝を壊してＳＸ９の周溝が掘削されたことが確認された。

北辺周溝から土師器小片が出土している。

ＳＸ９　調査区南西部、ＳＸ７の西側で検出した。南辺周溝の全てと、西辺周溝の南半分が削平されており、遺存する周溝も撹乱により一部が壊されている。

周溝の内法で東西約13.5ｍになり、今回の調査で確認された方形周溝墓のうち、最大の規模を持つ。周溝の断面形状はU字型である。

北辺周溝は幅約3.2ｍ、深さ約0.45ｍである。ＳＸ７と共有する周溝のうち、ＳＸ９の周溝埋土から須恵器甕と高杯脚部、土師器甕が出土した。

３　遺物（第16図）

今回の調査では方形周溝墓に供献されたと見られる遺物は確認されなかった。しかし、周溝内からは縄文土器片や７世紀後半の土師器や須恵器が数点出土した。

以下、主なものについて概述する。

ＳＸ１出土遺物（１～５）　１は北辺周溝内から出土した小型の土師器高杯である。脚部の裾が大きく開き、くびれ部にオサエが明瞭に認められる。２は西辺周溝から出土した土師器甕である。体部外面はハケメ、内面はナデやオサエ調整される。３は、北辺周溝の陸橋より東側から出土した須恵器高杯である。ラッパ状に開く脚柱部の中央部と杯部に沈線が巡る。４は北辺周溝の陸橋より西側から出土した須恵器短頸壷である。平底で肩部が稜角をなす胴長の体部に、わずかに外反する口縁部をもつ。５は北辺周溝から出土した須恵器長頸壷である。全体の半分に自然釉が付着する。頸部は外反し、脚部は屈曲する。肩部には刺突文、その下にカキメが施される。

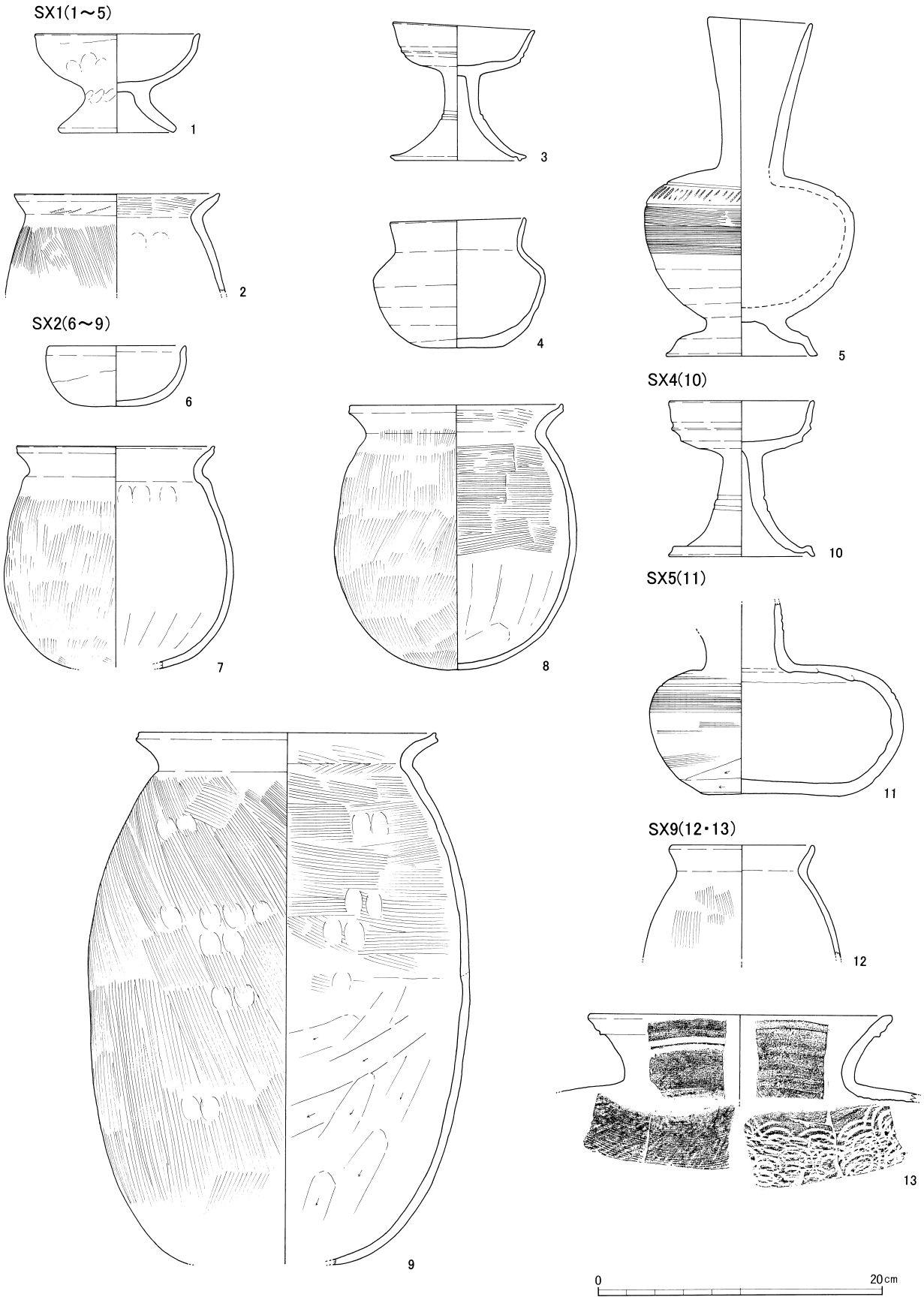
ＳＸ２出土遺物（６～９）　６は土師器椀。７・８は球形の体部をもつ土師器甕である。ともに体部外面はハケメ調整される。体部内面は７がケズリやナ

写真26　ＳＸ１～４（西から）

写真27　ＳＸ６（西から）

写真28　ＳＸ７・８（北から）

写真29　ＳＸ９（北から）



第16図　向山遺跡出土遺物実測図（１：４）

デによって調整されるのに対して、８は上半をハケメ、下半をヘラケズリ調整である。９は土師器長胴甕である。体部外面はハケメが施され、内面は下半をヘラケズリで調整し、上半にハケメを施す。

ＳＸ４出土遺物（10） 10は北辺周溝内から出土した須恵器高杯である。ラッパ状に開く脚柱部とほぼ直立する杯部からなる。脚柱部と杯部に沈線が施される。

ＳＸ５出土遺物（11） 11は東辺周溝内から出土した須恵器平瓶である。平底で扁平な体部に基軸からずらした広口の頸部を付す。肩部は丸みを帯び、自然釉で不明瞭であるがカキメが施され、その下位には沈線が巡る。

ＳＸ９出土遺物（12・13） 12は東辺周溝内から出土した土師器甕である。摩耗が激しくハケメが不明瞭である。13は東辺周溝内から出土した須恵器甕である。体部内面には同心円状の当て具痕が見られる。体部外面は上方にカキメ、下方にタタキが施される。

４　まとめ

今回の調査では近接する９基の方形周溝墓が確認された。これらの方形周溝墓は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて築造したと考えられる。ここでは向山遺跡の方形周溝墓の広がり方について若干の考察をしてみたい。

周溝が巡る方位に着目すると、調査区の東側に位置するＳＸ１～５はわずかに北北東に傾いているのに対して、西側に位置するＳＸ６～９はほぼ正方位を向いている。このことからＳＸ１～５とＳＸ６～９の築造には若干の時期差があったと考えられる。

方形周溝墓の築造推移については、周溝の共有状況から、ＳＸ１に隣接してＳＸ４が築造され、同様にＳＸ５→ＳＸ６→ＳＸ７の順に築造されたことが明らかになった。また、重複する周溝の土層断面からは、ＳＸ７より後にＳＸ９が築造されたことが確認された。

また、調査区の北部には遺構が検出されなかったことも併せて考慮すると、向山遺跡の方形周溝墓は東から西へとひろがっていったことが推測される。

墓域の広がりについては、調査区の北部は遺構が検出されなかったことから、向山遺跡における方形周溝墓は中位段丘面の縁辺部のみに築造され、東から西へと築造されていったと考えられる。

今回の調査では竪穴住居など集落跡が検出されなかったことから、方形周溝墓に埋葬された人々の居住域は特定できなかったが、墓域と居住域が分立していた可能性が認められる。

方形周溝墓は台地の縁辺部や独立丘陵上・自然堤防上など、周囲より若干高まりを有する地形に立地し墓域と居住域が分立して存在することは県内各地で検出された方形周溝墓の多くに見られる特徴で、向山遺跡で検出された方形周溝墓もこれに当てはまることが言える。

しかし、居住域がどこにあったのかという課題が残る。四ッ野Ｂ遺跡からは弥生時代後期から古墳時代初頭に最盛期を迎える集落跡が検出されている[⑤]が、向山遺跡からは約1.5㎞も離れていることから向山遺跡の方形周溝墓に対する集落域とするには当てはまらないと思われる。

今回の調査区から南西に約150ｍ離れたところに位置する第１次調査区では、弥生時代後期と古墳時代前期の竪穴住居が検出されている[⑥]。検出されたのは各１棟であるが、今回確認された方形周溝墓に埋葬された人々の居住域を考える上で、一つの手がかりになるものと思われる。

【註】

① 中村光司「高茶屋銅鐸観察ノート」『津市埋蔵文化財センター年報４　平成10年度』津市埋蔵文化財センター 2000

② 津市埋蔵文化財センター「四ッ野Ｂ遺跡（第１次）発掘調査報告」『津市埋蔵文化財センター年報９－平成15年度事業概要・四ッ野Ｂ遺跡（第１次）発掘調査報告－』2005

③ 津市埋蔵文化財センター『向山遺跡発掘調査報告書』2003

④ 三重県埋蔵文化財センター『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報18』2007
〃　『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報19』2007

⑤ 註②に同じ

⑥ 註③に同じ

報 告 書 抄 録

ふ り が な	いっぱんこくどうにじゅうさんごうちゅうせいどうろまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほうにじゅう
書　　名	一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報 ２０
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報
シリーズ番号	２０
編 著 者 名	上村安生　薗部英幸　淺尾太　原田恵理子　石井康晴　水谷豊　角正芳浩　野嶌美沙子　才木薫　小林俊之
編 集 機 関	三重県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒515-0325　三重県多気郡明和町竹川503　　TEL 0596-52-1732
発行年月日	2008年(平成20年) 7 月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
こつくりあかさかいせき 木造赤坂遺跡	みえけんつしこつくりちょう 三重県津市木造町	201	b210	34° 39′ 19″	136° 29′ 41″	20070510 ～ 20080128	6,300	一般国道23号中勢道路建設
いけしんでんいせき 池新田遺跡	みえけんつしこつくりちょう 三重県津市木造町	201	b211	34° 39′ 7″	136° 29′ 40″	20070907 ～ 20071226	1,961	
むかいやまいせき 向山遺跡	みけんつしたかぢゃやこもりちょう 三重県津市高茶屋小森町	201	a797	34° 39′ 36″	136° 29′ 36″	20070806 ～ 20071129	2,393	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木造赤坂遺跡	集落跡	縄文～近世	方形周溝墓 竪穴住居 掘立柱建物 土坑 井戸 溝 区画溝　等	縄文土器 須恵器 土師器 土師質土器 陶器椀 瓦　石製品 銅製品	
池新田遺跡	集落跡	古墳前期 平安末 ～鎌倉	溝 墓　道路跡　等	縄文土器　古墳土師器　陶器椀 中世土師器	
向山遺跡	集落跡	縄文 弥生～古墳	方形周溝墓	縄文土器　須恵器　土師器	

要約		
	木造赤坂遺跡	雲出川下流の左岸の低位段丘上に位置する。周辺一帯は畑地ないしは水田である。弥生時代後期から古墳時代前期の方形周溝墓や古墳時代から奈良時代の竪穴住居、平安時代の溝、鎌倉時代から室町時代の掘立柱建物や溝・土坑・井戸などの遺構を多数確認した。特に、室町時代の遺構では、区画溝を４箇所確認した。調査区南東部は、昭和30年代に行われた土地改良事業によって大きく削平されており、井戸３基を確認した程度である。
	池新田遺跡	雲出川左岸の低位段丘北縁に位置する。古墳時代前期の大溝と取水路と考えられる溝、平安時代末から鎌倉時代の中世墓、溝、ピットなどを確認した。大溝からは朱彩された土器が出土した。中世の溝は地籍図と一致する溝とそれに先行する溝が検出され、地籍図と一致する溝の周囲では道路と考えられる溝状の遺構が確認された。中世墓からは完形の土師器皿４点、土師器小皿９点、陶器椀１点が出土した。
	向山遺跡	雲出川左岸の段丘南辺に位置する。弥生時代後期から古墳時代初頭の方形周溝墓９基確認した。墳丘部すでに削平されており、周溝のみが検出された。方形周溝墓は密接し、その周溝は共有あるいは、重複する。周溝は辺の中央や隅で途切れているものが多い。周溝からは縄文土器や土師器・須恵器が出土したが、方形周溝墓に供献された土器は検出されなかった。

一般国道 23 号中勢道路

埋蔵文化財発掘調査概報２０

2008（平成 20 年）7 月

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印　　刷　東 海 印 刷 株 式 会 社